

第113図 航立遺跡出土繩文土器(2)

出土している。

32 の口縁部文様帶は横走する平行沈線の上に、円形竹管文が垂下し、34 は、地文が  $R\{L$  の繩文の上に棒状工具による刺突の垂下が認められる。33 は、屈曲部に位置し、横位に 2 条竹管による押引が認められる。35 は、竹管状工具による平行沈線によって矢羽状のモチーフを作ったものである。地文には  $R\{L$  の繩文が施文されている。36 は地文に  $R\{L$  の繩文を用い、横位に平行沈線を、37 は曲線に 2 本対にした棒状工具を施文したものである。38 は幅狭の平行沈線が集中して横走しているものであり、地文には  $R\{L$  の繩文を用いている。39 は  $R\{L$  の繩文の胴部である。

40~43 は同一個体である。集合条線の羽状文を地文とし、結節状浮線文が貼り付けられている。口縁部では横位に 3 本そして縱位、斜位にと三角状のモチーフを作り、以下には、長さ 1 cm を測る結節状浮線文が垂下している。50・51 は、数本単位の集合条線が羽状に施文されているものである。52・53 は同一個体である。無文であるが、横方向のヘラ状工具の整形が認められる。

## 第 2 類（第 113 図 45・46）

いわゆる浮島式に比定されるものである。

45 はハマグリ貝類の貝殻腹縁の支点をずらしながら施文した、波状貝殻文である。46 は、沈線区画内にアナダラ貝類の貝殻腹縁を連続押捺したものである。なお、陰刻文が認められる。

## 第 6 群土器（第 113 図 44、第 114 図 47~49、54~69）

前期最終末に編年的位置が考えられる一群の土器を一括する。

47 は、幅狭の爪形文の押引を集合して曲線的なモチーフを呈するもので、地文には、沈線が斜位に施文されている。色調は茶褐色を呈し、胎土には片岩片を含む。44 と 48 は同一個体であり、集合する結節沈線繩文による曲線的なモチーフを描いている。余白部は削りとてある。49 は地文に  $R\{L$  と  $L\{R$  の羽状繩文を施し、結節状浮線文を施したものである。

54 は、口頂部がやや鋭角的であり、内側に切りおろしたような形状を呈する。口縁部には縱位に連続する沈線が巡り、以下には、隆帶上にキザミを有するものの両側縁に沈線及び隆帶下にも沈線によるモチーフが施されるものと思われる。色調は赤褐色を呈し、胎土には石英・雲母粒を含む、焼成のよい土器である。

55 は、口頂部が平坦であり、その側縁を肥厚させ、肥厚部に棒状工具による押捺がめぐる。胴部は竹管状工具による平行沈線が施文されている。56 は、口縁部が大きく外反し、内側に段を有している。口縁部には、三角状の粘土紐が貼付く。口縁部には、横に巡った隆帶上に指頭状の圧痕を有するものである。以下、平行沈線が施文されるものである。57・58 は、口頂部に粘土紐が貼付けられ、口縁部から平行沈線が横走するものである。59 は、口縁部が内折し、その口頂部に細い粘土紐が貼り付き、胴部には三角陰刻文が認められる。60 も 56 と同様指頭状の圧痕を有する隆帶が巡るものである。56・59 は赤褐色を呈し、粒子も細いが、57・58・60 は胎土に石英等の細砂粒を含み、色調は、黄褐色を呈している。61 は、竹管状工具による平行沈線の集合沈線で幾何学的なモチーフを描き、間に三角陰刻文が施されている。62 は 56 と同一個体であり、半截竹管による平行沈線が横位にめぐり、以下集合状の平行沈線による幾何学的文様が描出されている。63・64 は、平行沈線による集合沈線が綾衫状に施文されているものである。65 は同心円状になっている。平行



第114図 舟立遺跡出土縄文土器(3)

沈線は深く施文されているため、断面はカマボコ状を呈している。63～65は黄褐色を呈し、胎土には、雲母粒、砂粒を含む。

66は、原体 R {<sup>L</sup><sub>L</sub>} の側面圧痕を2条有する。67は、口縁部がやや平坦な作りをするものである。胴部には L {<sup>R</sup><sub>R</sub>} の縄文が施文されている。

68の口縁断面は角棒状を呈している。文様は2条の鋸歯状の陰刻文の下に、棒状工具による曲線文が施文されるものである。69の器形はやや内湾しており、「く」の字に括れる部分で欠損している。口唇部は内側肥厚部に一条の沈線が巡る。なお、他の口頂部には、棒状工具によるキザミが巡っている。口縁部には、横走する沈線内に、棒状工具による綾杉文を施文し、下段には縦位の単沈線が横位に連続して巡る。器厚は比較的厚く 11 mm を測る。色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。

第7群土器（第112図2、第114図70～83、第115図84～100）

中期初頭に含まれる土器群を一括した。文様により4類に分けられる。

第1類（第112図2、第114図70～83、第115図84～85）

全面に縄文が施文されているものをまとめた。

第112図2は折返し口縁を有し、口縁部がやや内傾し、胴部でやや膨らむ形状を示す深鉢形土器である。口径 34 cm、現高 27.5 cm を測る。口縁部には、竹管状工具による平行な刺突文が2条巡る。胴部は、原体 R {<sup>L</sup><sub>L</sub>} の結束縄文が多段施文されている。縄文の施文は、左から右方向に、下から上に向って行なわれている。色調は明褐色を呈し、胎土には雲母粒及び砂粒を含む。

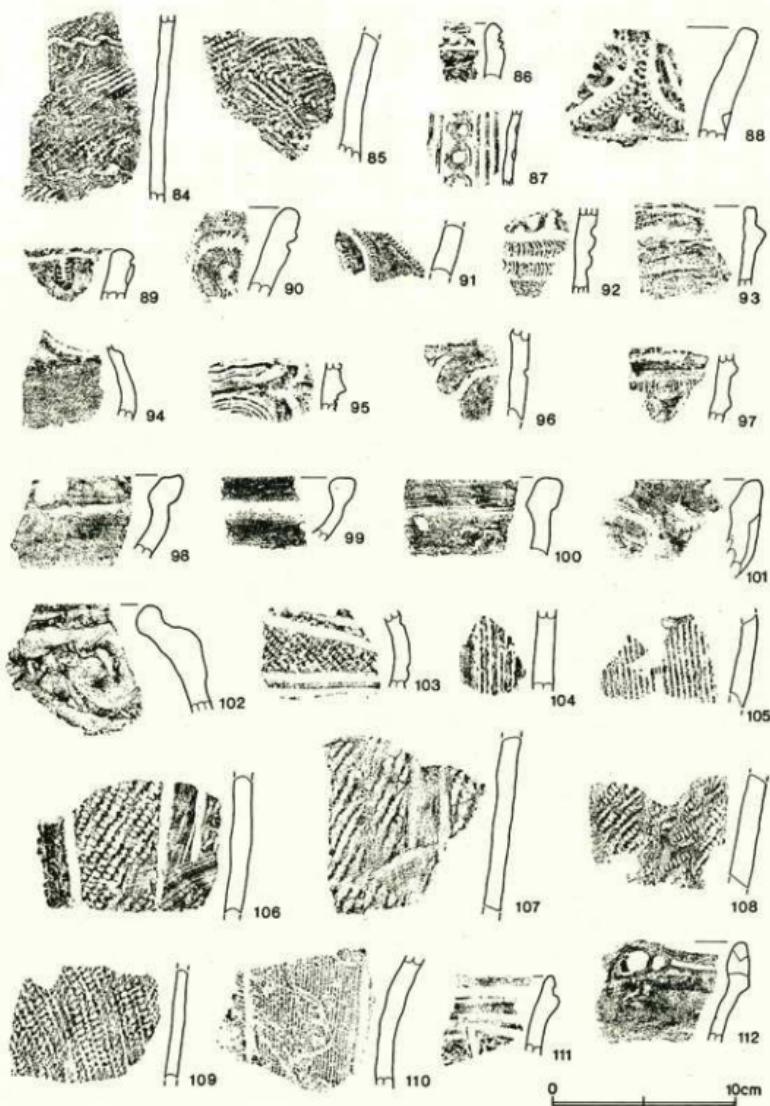
70は、口唇部がやや内切した口縁を有し L {<sup>R</sup><sub>R</sub>} の原体の末端を結節にした縄文を施文している。71は口頂部に沈線を有している。口唇部には何か貼付けてあったが欠損している。その直下に、角棒状工具による刺突があぐる。地文は原体 R {<sup>L</sup><sub>L</sub>} の縦方向の縄文である。72～75は、輪積痕を外面に残した土器であり、口頂部は小さくなっている、縄文の圧痕（72、73、75）及び指頭の圧押により波状を呈している。いずれも器面には L {<sup>R</sup><sub>R</sub>} の縄文が施文されている。胎土には白色及び雲母粒子を含む。暗褐色の土器である。76は弧状の沈線内に縦位の沈線が入るものである。地文には結束の羽状縄文の末端が結節されたものが縦位に施文されている。77～79は、原体 L {<sup>R</sup><sub>R</sub>} の末端が束ねられて、弧状を呈している。80・81も 76 と同様の縄文である。82～84は原体 L {<sup>R</sup><sub>R</sub>} の末端が結節になっているものである。85は結束の羽状縄文である。いずれも胎土に砂粒・雲母粒が多量に含まれている。色調は明褐色を呈する。

第2類（第115図86～91）

縄文中期初頭、下小野・五領ヶ台式に編年の位置が考えられている土器を一括した。

86は、口唇部直下に幅広の平行沈線をめぐらし、内に円形刺突を加えたものである。87は、竹管状工具を縦位に垂下させ、間に陰刻を行い円文を繋げた様な形状にしたものである。器厚は 4 mm と薄手である。色調は茶褐色を呈し、胎土に雲母粒を含む。88～91は太い沈線によりモチーフを描き、沈線内側縁に竹管状工具による連続爪形文が巡るものである。色調は茶褐色、胎土には白色粒・雲母粒及び砂粒を含む。

第3類（第115図92）



第 115 図 帆立遺跡出土繩文土器 (4)

勝板式土器に比定されるものである。

指頭圧痕を有する隆帯の下部に、竹管状工具の腹部による連続押引文が施される。

第4類（第115図93～100）

阿玉台式土器に比定されるものを一括した。

93は、波状口縁の土器と思われ、波頂部から隆帯が口唇部を巡っている。94も波頂部の一部であろう。95は先端の尖った隆帯によって区画され、半截竹管による平行沈線が隆帯下から描かれるものである。96はやや太い沈線が曲線を描くもの、97は地文に竹管状工具による集合平行沈線を施文し、上に断面三角形の隆帯を貼付けたものである。胎土中には大粒の砂粒が顯著に認められる。98～100は無文土器である。口縁部が肥厚し、「く」の字状に内湾する。また、口頂部は平坦であり、内側に張り出している。ヘラ状工具により、横方向に成整してあり、なめらかである。色調は暗褐色を呈し、胎土に雲母粒及び砂粒を多く含む。

第8群土器（第115図101～110）

加曾利E式土器を一括した。

101・102は太い隆帯の渦巻きによって口縁部文様帶が描出されている、口縁部が内湾するキャリバー形を呈している深鉢形土器である。103はやや太い沈線により口縁部文様帶が区画され、渦巻文を有する隋円区画文のモチーフが描かれる。区画内には、原体R{L}による縄文が施文されている。縄文施文後に沈線を引いているものと推察される。104・105は原体L{R}による密な撚糸文が継続するものである。107・108は、キャリバー形土器の胴部破片と思われるものであり、沈線区画内に縄文が施されるものであり、その施文順位は、縄文施文後沈線区画し、区画外を磨消しており、いずれも、原体L{R}の斜縄文が施されている。なお両者とも接合部で剥奪しているのが看取される。108は、沈線区画内に棒状工具による条線が施され、さらにそれを地文とし曲線が垂下している。109・109・110は縄文の施されたものである。色調は明褐色を呈する。

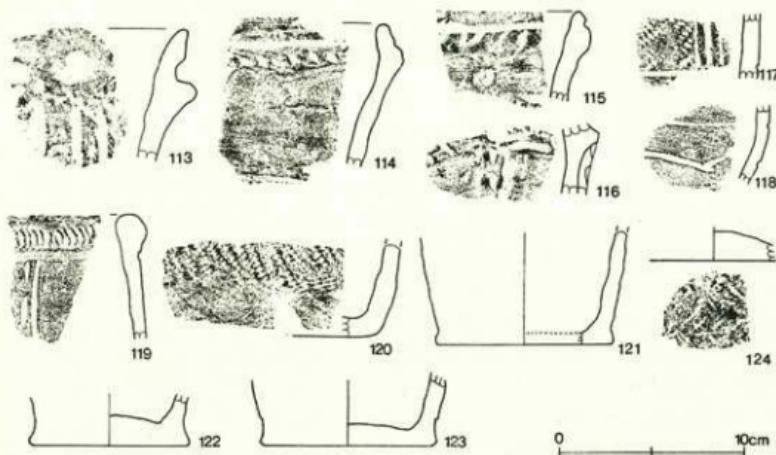
第9群土器（第115図111・112、第116図113～118）

縄文後期の掘之内I式土器を一括する。

口縁部が肥厚外反し、口縁部に添い一条の沈線がめぐるものである。111は縄文を地文としモチーフを描出している。112は波状口縁を呈し、波頂部に小穴が穿たれ、左右に盲孔を配し、それを基点として沈線が巡っている。以下は幅広の無文帯が形成されている、口縁が「く」の字形を呈する深鉢形土器を呈すると思われる。115は波状口縁の波頂部に盲孔が穿たれ基点としている。文様は縄文を地文とし沈線によるモチーフが施されている。116・117は、口縁の肥厚部に連続刺突が巡り、以下は、幅広の無文帯を有し、胴部に沈線によるモチーフが描出されるものである。116は口縁部無文帯上に隆帯が垂下するものである。隆帯は棒状工具による刺突を有し、くさり状を呈する。117は沈線区画内に原体L{R}による縄文が施されたもので、磨消手法によるものであろう。118は口縁部付近の破片と思われ、一条の横走する沈線とゆるやかな波状文から描かれている。浅鉢形土器であろう。色調はすべて明褐色ないし赤褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。

第10群土器（第116図119）

安行式土器と思われるものである。



第116図 帆立遺跡出土縄文土器（5）

口縁が著しく肥厚し、肥厚部には竹管状工具による連続爪形文が施文される。肥厚部直下には一条の沈線が巡り胴部文様帶とを区画している。胴部は沈線区画内に刺突が垂下するものである。器壁の薄い焼成のよい土器である。

底部土器は一括して扱った（第116図120～123）。

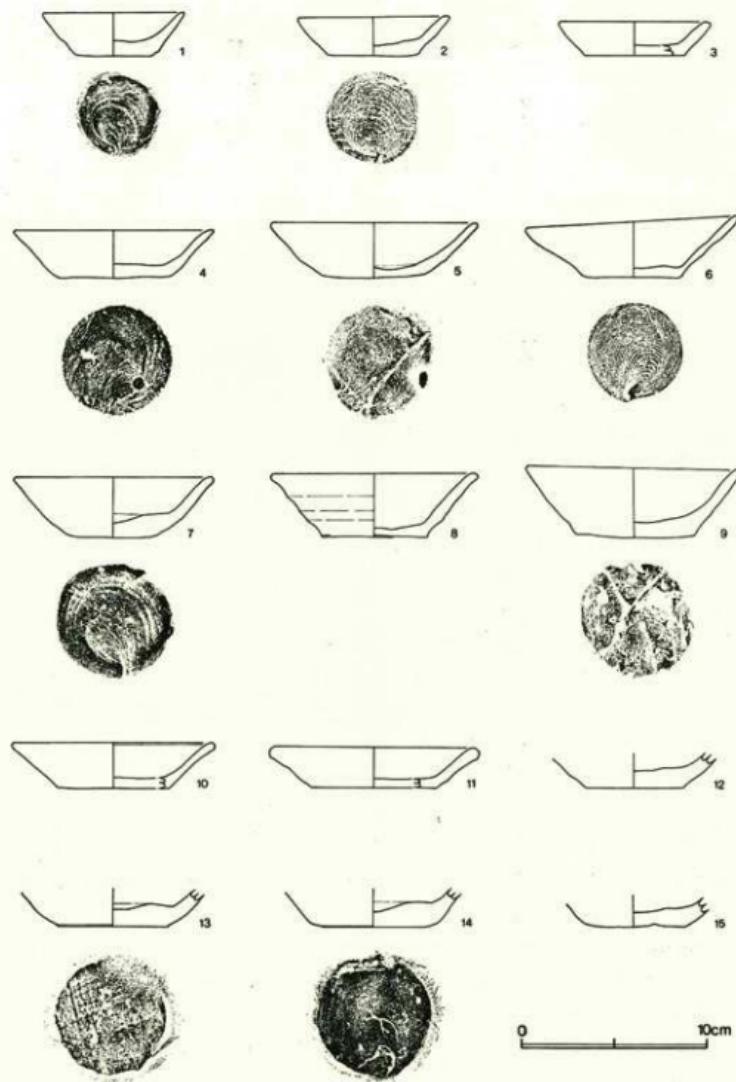
120は、原体R $\left\{ \begin{smallmatrix} L \\ 1 \end{smallmatrix} \right.$ の斜縄文が施文されている。丸まった底部を呈している。121～123は底部がえら状に張り出した特徴的な土器である。126は木葉痕を底部に有するものである。120は諸磯式土器、121～123は堀之内式期に比定されよう。

（青木美代子）

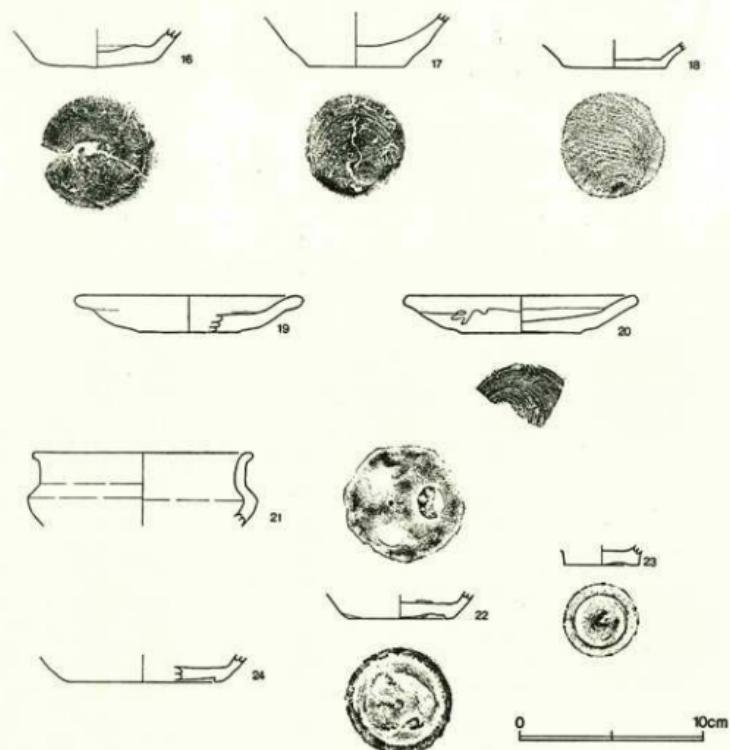
### 歴史時代

土師質土器皿（かわらけ）（第 117 図 1~15, 第 118 図 16~18）

1. 口径 7.7 cm・底径 4.1 cm・器高 2.4 cm を計り、色調はにぶい橙色 (7.5 YR 7/4) を呈する。胎土は、微細な透明粒子と金雲母を僅かに含む。内面は剥落多く、底部の糸切り離しは右轆轤回転（糸目は 1 cm に 5 本）による。
2. 口径 8.2 cm・底径 4.9 cm・器高 2.15 cm を計り、色調はにぶい橙色 (7.5 YR 7/4) を呈する。胎土は、黒色粒子と金雲母を僅かに含む。内面の剥落多く、口縁部にはタールの付着が有る。底部の糸切り離しは右轆轤回転（糸目は 1 cm に 5 本）による。
3. 推定口径 8.2 cm・推定底径 5.4 cm・器高 1.9 cm を計り、色調はにぶい黄橙色 (10 YR 6/3) を呈する。部分的に煤が付着し、黒色を呈する部分がある。胎土中には含有物がほとんど無い。
4. 推定口径 10.8 cm・底径 6.0 cm・器高 2.0 cm を計り、色調はにぶい橙色 (5 YR 6/4) を呈する。胎土は、黒色粒子を含む。内外面に煤の付着が有る。底部の糸切り離しは左轆轤回転（糸目は 1 cm に 8 本）による。
5. 口径 11.2 cm・底径 5.5 cm・器高 3.8 cm を計り、色調は橙色 (5 YR 6/6) を呈する。胎土中には含有物がほとんど無い。底部の糸切り離しは右轆轤回転による。
6. 口径 11.5 cm・底径 5.1 cm・器高 3.0 cm を計り、色調は灰白色 (2.5 YR 8/2)～浅黄橙色 (10 YR 8/3) を呈する。胎土は、砂粒、透明粒子、白色粒子を僅かに含有する。硬質で、底部内面には横方向のナゲが施される。底部の糸切り離しは左轆轤回転（糸目は 1 cm に 7 本）による。
7. 推定口径 10.8 cm・底径 5.5 cm・器高 3.3 cm を計り、色調は橙色 (5 YR 6/6) を呈する。胎土は極めて僅かであるが黑色粒子を含む。底部と口縁部の境に段を持ち、その部分から分離している（粘土帯の接合部分を考えられる）。底部の糸切り離しは右轆轤回転による。
8. 推定口径 11.2 cm・推定底径 5.7 cm・器高 3.5 cm を計り、色調は浅黄橙色 (10 YR 8/3) を呈する。胎土は、赤色粒子を含むが極めて僅かである。内外面に部分的ではあるが煤の付着が認められる。7 と同様に底部と口縁部が分離する。
9. 口径 11.6 cm・底径 5.8~6.7 cm・器高 3.8 cm を計り、色調はにぶい橙色 (7.5 YR 7/4) を呈する。胎土は、僅かに砂粒を含む。底部の糸切り離しは糸によるが、轆轤の回転方向は不鮮明。
10. 推定口径 11.4 cm・推定底径 6.8 cm・器高 2.2 cm を計り、色調は橙色 (7.5 YR 6/6) を呈する。胎土は、黒色粒子、砂粒を含む。
11. 口径 11.0 cm・推定底径 6.0 cm・器高 2.5 cm を計り、色調はにぶい橙色 (7.5 YR 7/4) を呈する。胎土は、砂粒をやや多く含む。口縁端部内側に沈線が巡る。
12. 底径 5.2 cm を計り、色調はにぶい橙色 (7.5 YR 7/4) を呈する。胎土は、赤色粒子を僅かに含む。部分的に煤が付着する。底部の糸切り離しは右轆轤回転による。
13. 底径 6.0 cm を計り、色調は橙色 (5 YR 7/6, 7.5 YR 7/6) を呈する。胎土は、白色針状物質、透明粒子、黒色粒子を極めて僅かであるが含む。底部には格子目の圧痕が付いている。器面部部分的に煤が付着している。
14. 底径 5.9 cm を計り、色調は浅黄橙色 (10 YR 8/4)～にぶい黄橙色 (10 YR 7/4) を呈する。



第117図 歴史時以の遺物(1)



第118図 歴史時代の遺物（2）

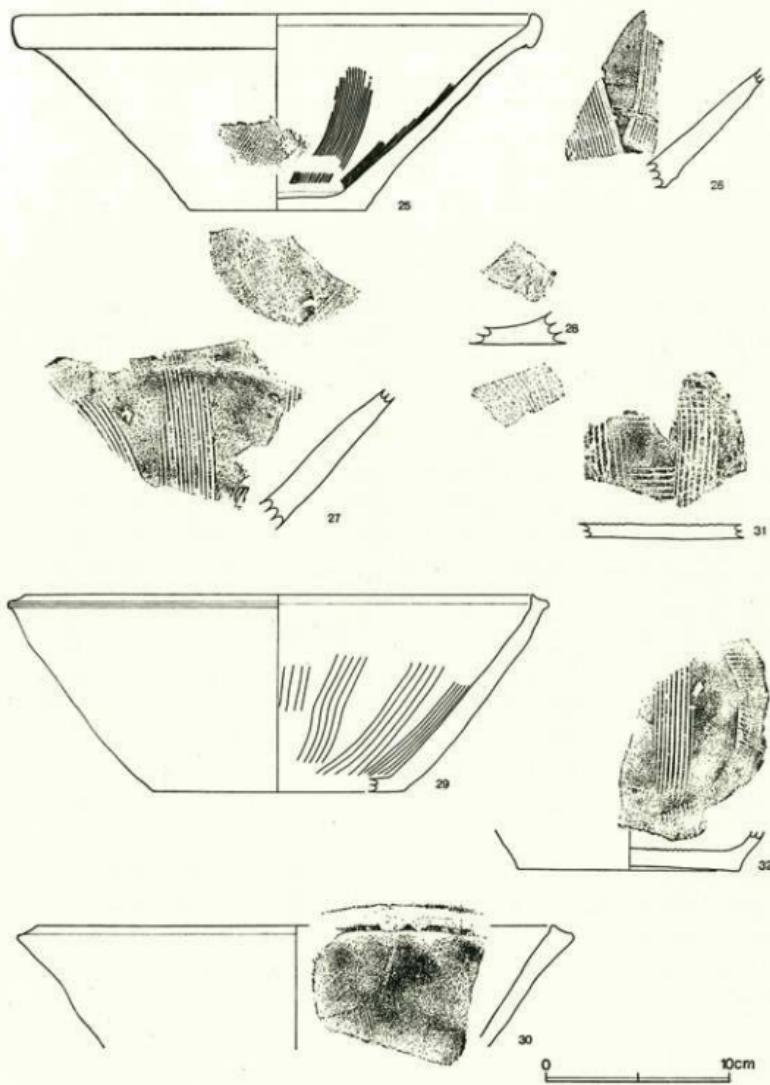
胎土は、黒色粒子、微細な金雲母を極めて僅かであるが含む。底部の糸切り離しは右轉轂回転による。

15. 底径 5.4 cm を計り、色調は橙色 (7.5 YR 7/6) を呈する。胎土に微細な金雲母を極めて僅かであるが含む。底部には切り離し後に粘土が付着している。

16. 底径 6.0 cm を計り、色調はにぶい橙色 (7.5 YR 6/4) を呈する。胎土中には含有物がほとんど無い。底部はやや外側へ膨らみ安定が悪い。底部の糸切り離しは右轉轂回転による。底部と口縁部の接合部分に間隙がある。

17. 底径 5.1 cm を計り、色調は橙色 (5 YR 7/6, 7.5 YR 7/6) を呈する。胎土は、微細な金雲母を極めて僅かであるが含む。底部の糸切り離しは右轉轂回転による。部分的に煤が付着する。

18. 底径 5.6 cm を計り、色調はにぶい黄橙色 (10 YR 7/3, 7/4) を呈する。胎土は、黒色粒子、砂粒を含む。器面部分的に煤が付着する。底部内面に整形時の渦巻形の凹凸が有る。底部の糸切り

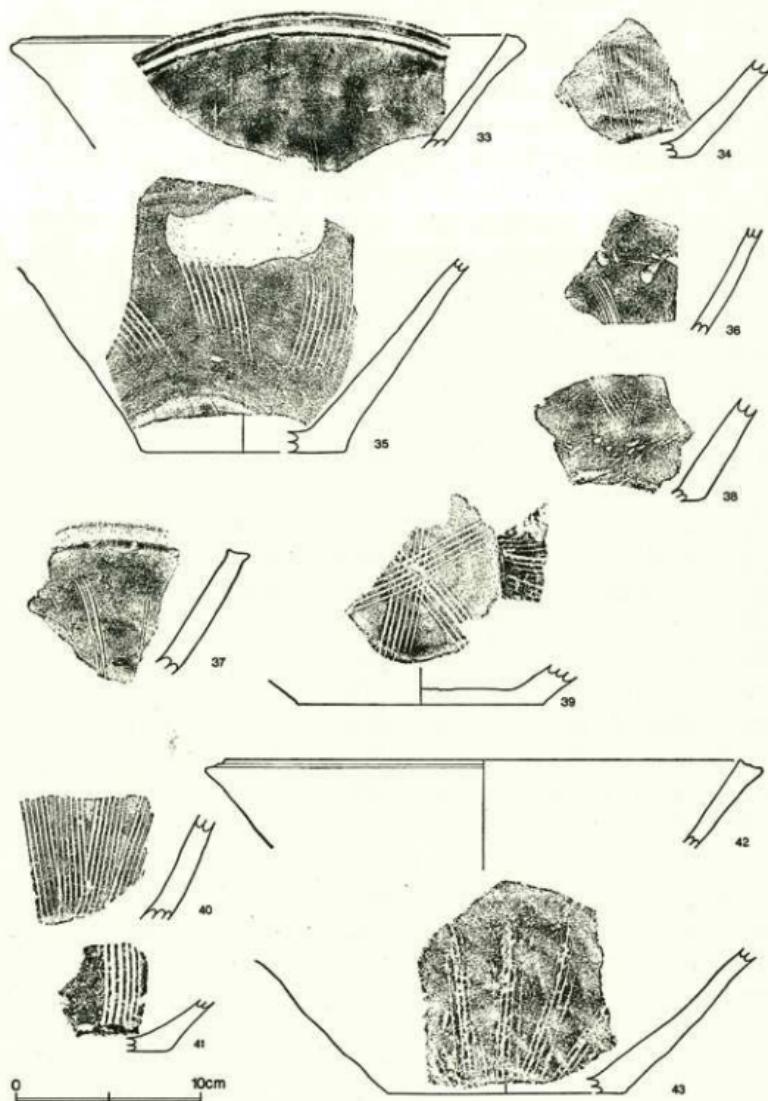


第119図 歴史時代の遺物（3）

離しは左轉轂回転（糸目は 1 cm に 11 本）による。また、切り離し後に板目状の圧痕が付く（図版42）。

陶磁器（第 118 図 19~24）

19. 推定口径 12.4 cm・推定底径 5.4 cm・器高 2.0 cm を計り、色調は素地が白色（N 9/ ），施釉部分は薄いが灰白色（5 GY 8/1）を呈する。胎土は、僅かに砂粒を含み、細かい間隙がある。内面および断面に煤の付着が有る。器形は小皿。瀬戸産？
  20. 推定口径 12.8 cm・推定底径 6.4 cm・器高 2.1 cm を計り、色調は素地が灰白色（N 8/ ），施釉部分はオリーブ灰色（10 Y 5/2）を呈する。胎土は、僅かに砂粒を含み、細かい間隙がある。底部の糸切り離しは右轉轂回転による。器形は小皿。瀬戸産？
  21. 推定口径 12.0 cm を計り、色調は素地が灰白色（5 Y 7/1），釉がオリーブ灰色（10 Y 5/2）を呈する。胎土は、細かい間隙が有り、器壁面には黒色の微細な斑点がある。器形は香炉。瀬戸産。
  22. 底径 5.6 cm を計り、色調は全面施釉により黒褐色（7.5 YR 3/1）を呈するが、胡麻様にぶい赤褐色（5 YR 5/4）が入る。胎土は、細かい間隙が有り、素地は灰白色（10 YR 8/1）である。底部内外面ともに焼成時のトチン痕が残り、不出来である。底部外面は右轉轂回転による糸切り離し後、ヘラで一周高台内側を削り取っている。美濃産。
  23. 底径 4.1 cm を計り、色調は内面が施釉により黒褐色（5 YR 3/1）を呈し、22 同様にぶい褐色（7.5 YR 6/3）が多く入る。外面は暗青灰色（5 B 3/1）である。胎土は、素地が灰白色（2.5 Y 8/2）を呈し、細かい間隙が少し有る。底部成形は 22 同様である。美濃産。B-10 Grid 出土。
  24. 船載青磁。接地部での推定底径 7.0 cm を計り、色調は全面に釉が施され、オリーブ灰色（5 GY 6/1）を呈する。胎土は、灰白色（10 Y 7/1）の素地で緻密であるが、部分的に細かい間隙が入る。底部は削り出し高台で、高台内側は垂直になり、外側は体部からの延長となる。
- 擂 鉢（第 119 図 25~32, 第 120 図 33~43, 第 121 図 44~46）
25. 推定口径 28.6 cm・推定底径 9.6 cm・器高 10.6 cm を計り、口縁端部は内側上方に丸味を持って小さく突出し、外側は折り返され縁帶となる。櫛目は 24 条を 1 単位としている。器壁内外面とも荒い。色調は釉が施され、青黒色（5 PB 2/1）ないし紫黒色（5 P 2/1）を呈する。胎土は、灰白色（2.5 Y 8/2）の素地で、細かい間隙が多くられる。体部中央には粘土帯の接合痕が残る。底部の糸切り離しは右轉轂回転による。美濃産。
  26. 櫛目は 15 条以上を 1 単位としている。器壁は 25 同様荒い。色調は施釉により暗紫灰色（5 P 3/1）を呈し、外面はやや光滑を有する。胎土は、僅かに細かい間隙があり、素地は灰白色（2.5 Y 8/1）である。美濃産。
  27. 櫛目は 12 条を 1 単位としている。器壁内面は滑らかであるが外面はやや荒い。色調は釉が施され光滑を有し、外面が暗紫灰色（5 P 4/1）、内面が灰褐色（5 YR 4/2）～暗青灰色（5 PB 3/1）を呈する。胎土は、細かい間隙が多くみられ、白色粒子（1~8 mm 大）を含む。素地は灰白色（10 YR 8/1）である。美濃産。
  28. 底部で回転糸切り離し痕が残る。釉が施され内面は光滑を有し紫黒色（5 P 2/1）を、外面はにぶい赤褐色（2.5 YR 5/4）を呈する。胎土は、細かい間隙が有り、石英粒子を含む。素地は灰白色



第120図 歴史時代の遺物(4)

(2.5 Y 8/1) である。表土出土。

29. 推定口径 39.4 cm・推定底径 13.6 cm・器高 10.8 cm を計る。櫛目は 5 条を 1 単位としている。体部は内湾し、口縁部で一端窪み、端部で内外面に小さく突き出し、端面は少し窪む。色調は灰色 (7.5 Y 5/1) を呈し、部分的ににぶい黄橙色 (10 YR 7/2) となる。胎土は、白色粒子を多く含み、細かい間隙がある。素地は灰白色 (5 Y 7/1) である。外面の体部下半と口縁部内外面は横ナデが施され、その他は斜方向のナデを横ナデの後に行っている。底部の切り離しは整形されており不明。

30. 推定口径 30.3 cm。櫛目は 6 条以上を 1 単位としている。口縁端部は内側へ僅かに突き出し、外側へは肥厚する。端面は少し窪み、外側寄りは僅かに巻き込む。色調は内面が灰色 (5 Y 5/1), 外面が灰色 (N 4/ ) を呈し、部分的に素地の色が出る。胎土は、砂粒を含み白色粒子が目立つ。端部寄りは横ナデが施され、体部外面は指頭による押えの凹凸が残る。細かい間隙があり、素地は灰白色 (7.5 Y 7/1) である。29~43 では最も硬質。

31. 底部で、切り離し痕は不定方向のヘラケズリにより消滅している。櫛目は 9 条を 1 単位としているが、両端の 2 条は浅い。色調は内面が灰色 (N 4/ ), 外面が灰色 (10 Y 5/1) を呈するが、内面は素地の色が部分的に出る。胎土は、砂粒を少し含み、白色粒子が目立つ。細かい間隙があり、素地は灰白色 (10 Y 7/1) である。

32. 推定底径 12.0 cm。櫛目は 10 条を 1 単位としている。色調は内面が灰黄色 (2.5 Y 7/1) であるが、部分的に灰色に還元している。外面は黒色の付着物がほぼ全面にある。胎土は、微細な砂粒が僅かに混入し、白色粒子が目立つ。細かい間隙もあり、素地は暗灰黄色 (2.5 Y 5/2) で、器壁よりは明るい。底部の切り離しは、不定方向のヘラケズリにより不明。また内面は横方向の使用痕が明瞭に残る。

33. 推定口径 28.0 cm を測り、櫛目は 8 条以上を 1 単位としている。口縁部は肥厚し、端部内側に僅かに突き出る。また端面は中央で低い段を持って凸状に突出する。色調は外面が灰白色 (5 Y 7/1)~灰色 (5 Y 5/1), 内面が灰白色 (5 Y 7/1)~灰色 (10 Y 4/1) を呈する。胎土は、僅かに白色粒子を含み、細かい間隙が僅かに入る。素地は灰白色 (10 Y 7/1) である。内外面とも口縁部寄りは横ナデが施されるが、体部内面は斜方向のナデが施され、外面は 30 同様指頭による押えの痕が残る。

34. 櫛目は 5 条と 6 条を単位としている。色調は灰白色 (5 Y 7/1)~灰黄色 (2.5 Y 6/1) を呈し、胎土は、砂粒を含み、細かい間隙がある。素地は中央で酸化しており、にぶい橙色 (7.5 YR 7/3) を呈する。底部の切り離しは整形のため不明。内外面とも横方向のナデが施されている。成形は左轉體回転。

35. 推定底径 11.0 cm をり、櫛目は 8 条を 1 単位としている。色調は灰色 (5 Y 6/1)。にぶい黄橙 (10 YR 6/3) を呈し、外面底部および底部寄りは黒ずむ。内外面とも横方向のナデが施されている。底部は糸切り離しの後、外縁をヘラケズリしている。胎土は、白色粒子や微細の雲母を含み、細かい間隙がある。素地は器壁面側が酸化気味であるが、他は灰白色 (10 Y 6/1) である。櫛目は底部寄りですべて消失している。



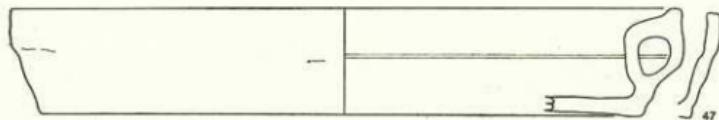
44



45



46



47



48



49



50



51



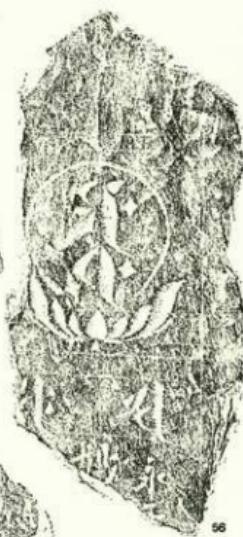
52



53



57



56



54



10cm

— 0 —



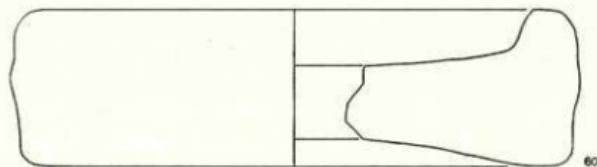
59



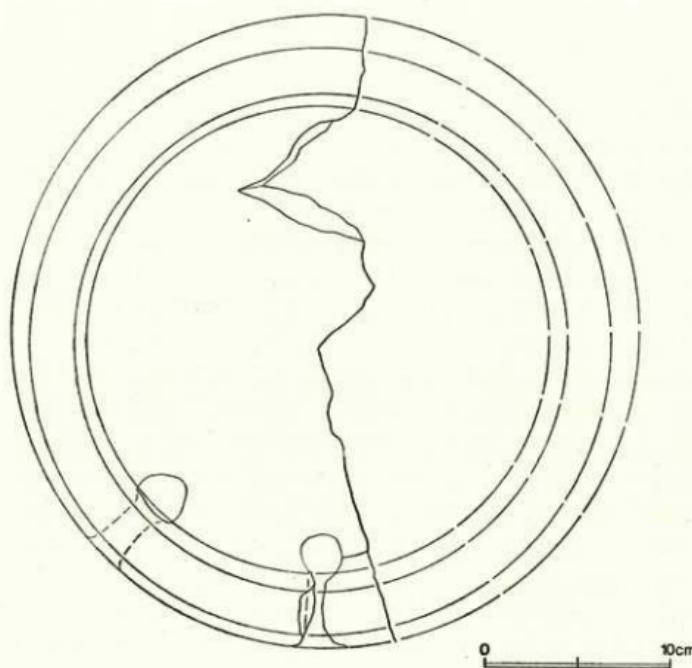
58

第121図 歴史時代の遺物(5)

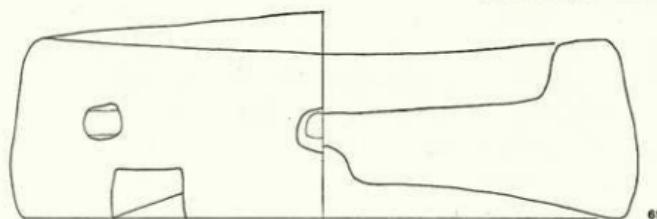
36. 檜目は5条以上を1単位としている。色調は灰黄色(2.5Y7/2)を呈する。胎土は、白色粒子を含み、細い間隙が入る。内面および外面口縁部側は横ナデが施され、外面は指頭の圧痕が残る。
37. 檜目は6条以上を1単位としている。色調は全面燃んでおり、黒褐色(2.5Y3/1)～黒色を呈する。胎土は、砂粒を含み、白色粒子が目立つ。素地はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、口縁部は端部寄りで一端窪み、端面も窪む。口縁端部寄りは横方向のナデが施され、体部は斜方向が多い。外面のナデは口縁部のみ明瞭。
38. 檜目は6条を1単位としている。色調は内面が黒色で、素地も表面近くまで黒色であるが、外  
面および内面の底部寄りはにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。胎土は、白色粒子を僅かに含むが混入物は少なく、間隙も余り無い。良くすらされている。
39. 推定径13.4cmを計り、櫛目は6条を1単位としている。色調は素地ともにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、表面は部分的に黒色に燃んでいる。底部の切り離しは不明。
40. 胎土、色調とも39に類似するが、櫛目幅がやや狭い。
41. 檜目は6本以上を1単位としており、底部から始まり、溝出土の擂鉢の中では最も単位の間隔が狭い。色調は灰白色(2.5YR6/6)、灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。胎土は、やや大きい白色粒子を含み、細かい間隙がある。素地は橙色(2.5YR6/6)である。底部は整形されており、切り離しは不明。
42. 推定口径30.2cmを計り、櫛目ははっきりしないが、4条以上を1単位としている。色調は外面が橙色(2.5YR6/6)、内面が橙色(7.5YR6/6)～にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。胎土は、僅かに砂粒、透明粒子を含み、間隙がある。素地はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。内外面口縁部寄りは横方向のナデが施されるが、外面は指頭による押えの痕が残る。
43. 推定底径12.8cmを計り、櫛目は5条1単位で左回りに付けられている。色調は橙色(2.5YR6/6)で、底部および底部寄りは浅黄色(2.5YR7/3)を呈する。胎土は、砂粒を多く含み、部分的に間隙がある。器壁面が橙色の部分は素地が灰黄色(2.5Y6/2)で、浅黄色の部分はにぶい橙色(5YR6/4)を呈する。
44. 檜目は13条を1単位をしている。口縁部は3.2cm折り返され、内面側には1条、外面側には2条の沈線を巡らす。色調は橙色(2.5YR6/6)～にぶい橙色(5YR7/4)を呈する。胎土は、石英粒子および白色粒子を含み、間隙は少ない。器面はヨコナデが施されている。A-19 Grid出土。
45. 檜目は7条以上を1単位としており、口縁部は内側へ大きく屈曲し、外側へ2.3cm折り返される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、光滑を保つ。胎土は、石英粒子、白色粒子を多く含み、僅かに間隙がある。素地は灰色(N5/ )を呈する。器面はヨコナデが施されている。B-19 Grid出土。
46. 檜目は6条以上を1単位としており、口縁部は3.4cm折り返され、44と同様に沈線を有する。色調は内面が赤灰色(2.5YR5/1)で、外面は口縁部寄りが灰赤色(2.5YR5/2)、体部は赤色(10R5/6)を呈する。胎土は、粘性の強い土で、石英粒子を含み、素地はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)である。内外面とも左糖輪回転により横方向にナデられている。B-19 Grid出土。44～46は焼き締められた炻器である。



60



0 10cm



61

第122図 歴史時代の遺物（6）

内耳土器 (第 121 図 47~55)

47. 推定口径 36.8 cm・推定底径 33.0 cm・器高 5.8 cm を計る。口縁部内面中位には明瞭な段を有する。底部外面は不定方向のヘラケズリ、他はヨコナデが施されるが、口縁部外面はヨコナデの後下半を指頭により押している。色調は底部内面は灰白色 (10 YR 8/2)~浅黄橙色 (10 YR 8/3) で、他は暗灰黄色 (2.5 Y 5/2)~黃灰色 (2.5 Y 4/1) を呈する。胎土は、砂粒を含み、器壁側 1 mm は器面と同色であるが、他は黒色である。口縁端部は水平で内側に僅かに突出している。外面の煤の付着は少ない。

48. 粘土帯の接合痕が残る。色調は口縁部外面下半が明褐色 (7.5 YR 5/6) を呈する他は黒色である。胎土は、砂粒を僅かに含み、細かい間隙がある。素地は器壁寄りが浅黄橙色 (10 YR 8/4) だが、中心は黒色である。整形は 47 に同じ。

49. 色調は煤の付着部分を除けば褐灰色 (10 YR 4/1) であり、胎土は、砂粒を含み、間隙が多い。素地はにぶい黄橙色 (10 YR 7/4) を呈する。

50. 色調は煤の付着部分を除けば灰黄褐色 (10 YR 6/2) を呈する。胎土は、僅かに砂粒を含み、器壁側が器面と同色である他は黒色である。整形は 47 に同じ。

51. 47~50 がほうろく形を呈するのに対して堀形である。色調は灰色 (N 5/) を呈し、外面は煤で黒色である。胎土は、砂粒を僅かに含み、細かい間隙があるが硬質である。素地は灰白色 (10 YR 8/1)。ヨコナデを施しているが、屈折部分より少し下の部分から指頭による押えの痕が内面に残る。

52. 色調は口縁部が褐灰色 (10 YR 5/1) を、底部が淡赤橙色 (2.5 YR 7/4) を呈する。胎土は、砂粒を含み、細かい間隙がある。素地の中心は黒色、器面に向ってにぶい黄橙色 (10 YR 7/3)、赤橙色 (10 R 6/10) の器面となる。整形は 47 に同じで、口縁部下半から底部は細かい亀裂が入る。

53. 口縁部中位に明瞭な段を持ち、端面は内側へ僅かに突出している。色調は外面の煤付着部分を除けば、橙色 (2.5 YR 6/6)~にぶい橙色 (7.5 YR 6/4) を呈する。胎土は僅かに黒色粒子を含み、細かい間隙がある。素地の中心は黒色で、器壁側は器面の色である。

54. 52 と胎土、色調が類似、同一個体の可能性がある。

55. 器高が高く、口縁部中位に粘土帯の接合痕があり、段を有する。色調は底部が浅黄色 (2.5 Y 7/3) で、口縁部はオリーブ黒色 (7.5 Y 3/1) を呈する。胎土は、黒色粒子を含み、素地中心が黒色となる。外面は煤の付着が多い。

板 碑 (第 121 図 56~58)

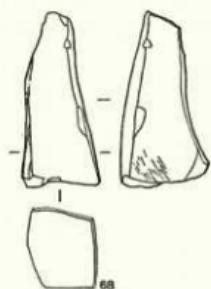
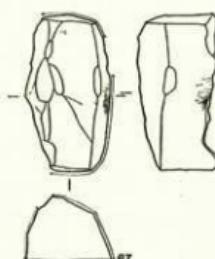
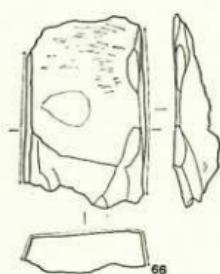
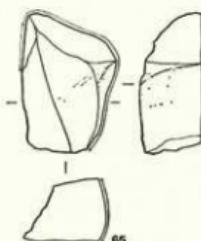
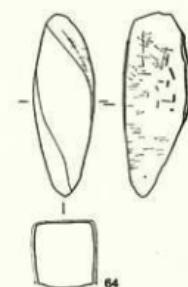
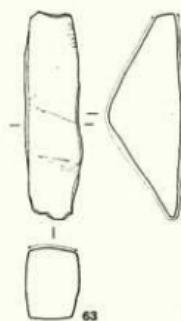
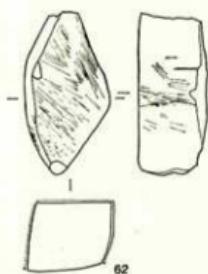
56. 現高 29.3 cm、幅 13.7 cm、厚さ 2.1 cm。阿弥陀三尊、月輪、蓮台が確認され、割付線が残る。裏面には横方向からの整形痕が残る。紀年銘として「永正」(永正年間は 1504~20) が読みとれ、中央には「妙」の文字がある。緑泥片岩。

57. 月輪と阿弥陀の一部が確認出来る。石墨片岩。

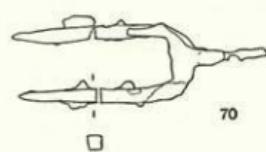
58. 上の文字は残存部では「月」と読めるが不明確である。下の文字は「祥」である。緑泥片岩。

玉形石製品 (第 121 図 59)

59. 円形に削り出し、穿孔する側を平坦に延び出している。孔を下に見れば、直径 4.3 cm、高さ



0 10cm



0 5cm



第123図 歴史時代の遺物 (7)

3.5 cm を測る。破損部分を含め、黒褐色の付着物が全面に付く。78 g。

石臼 (第 122 図 60・61)

60. 推定直径 30.8 cm を計る 穀磨臼の上臼である。全体の 1/7 程度、「こくくばり孔」や「引き手孔」部分は不明である。磨面は摩滅しており、溝ははっきりせず、煤が付着している。安山岩。

61. 直径 34.0 cm を計る 穀磨臼の上臼である。「こくくばり孔」は残存部分では認められない。「引き手孔」は良く使い込まれた為磨面側が消失している。側面には隅九方形の穿孔があり、新たな引き手孔として作られたと考えられる。磨面を平坦にみると摩滅が片寄っている。穀を含む硬砂岩。

砥石 (第 123 図 62~69)

62. 5 面体で、そのうちの 4 面が使用されている。菱形を呈する面には擦痕が多くみられるが、凸曲面部分には少ない。188 g。凝灰岩。

63. 5 面体で、そのうちの 3 面が使用されている。三角形を呈する面はほとんど使用されていない。141 g。凝灰岩。

64. 4 面体で、そのうちの 3 面が使用されている。132 g。B-11 Grid 出土。

65. 6 面体で、そのうちの 3 面が使用されている。うち 1 面は破損の為か、使用部分は少ない。140 g。凝灰岩。

66. 6 面体で、そのうちの 3 面が使用されている。179 g。凝灰岩。

66. 破片で、使用面は 3 面確認される。168 g。凝灰岩。

67. 多くの面があり、破損部分が一面ある。2つの短面部が最も良く使用されている。他は図示した面が良く使用され、反対側の面の使用は僅かである。199 g。凝灰岩。被熱による破損。煤の付着がある。

68. 6 面体で長軸の 3 面が良く使用され、凹曲面を呈する。179 g。凝灰岩。被熱により煤が付着している。

69. 6 面体であるが、そのうち 3 面が使用されている。23 g。粘板岩。B-15 Grid 出土。

その他

70. 鉄製品 (第 123 図 70)。残存長約 9 cm、幅 2.7 cm を計る。刃先部分は残存しているが、元側と接合せず、柄側も破損している。

71. 宽永通寶 (第 123 図 71)。銭径 2.35 mm、銭厚 1.1 mm、穿幅 6.2 mm を計る。B-6 Grid 出土。

以上、帆立遺跡出土遺物の観察を行ったが、縄文時代の遺物は、4、5 号土壙出土を除く多くが基本土層の 2 層中より出土している。歴史時代の遺物で Grid 名の無いものはすべて溝出土である。溝は上層出土遺物と下層出土遺物が接合しており、短期間に埋没した事が伺える。

(宮 昌之)

## 4 結 語

当遺跡の縄文土器は、小量の出土土器が多時期に亘って出土しており、大別して分類を行った。第1群土器 創草期（井草式）、第2群土器 早期前半（田戸下層式）、第3群土器 早期後葉（野島式～茅山下層式）、第4群土器 前期初頭（第1類 関山I式、第2類 黒浜式新段階）、第5群土器 前期後半（第1類 諸磯a～c式、第2類 浮島式）、第6群土器 前期最終末（十三菩提式）、第7群土器 中期初頭（第1・2類 五領ヶ台式、第3類 勝坂式、第4類 阿玉台式）、第8群土器 中期中葉（加曾利EI・II式）、第9群土器 後期前半（堀之内式）、第10群土器 晩期前半（安行IIIa式）。

以上のような様相を示すが、当遺跡では前期末より中期初頭の土器が多く出土している。40～43は諸磯c式に比定される土器であり、有明山社遺跡（山田 1969）に類似の土器が見られるが、当段階より同様の沈線の要素が五領ヶ台まで続く。十三菩提式については、出土例が少なく、結節状浮線文・集合した沈線・条線・三角形の陰刻文等、文様要素としては捕らえられるが、全体の文様構成は明瞭でない所が多い。その中にあり、47～49は範疇にとらえられるが、55～60は、61・62が、十三菩提式とされ、62と56が同一個体であるため当段階に分類した。なお、室ノ木遺跡第2群D類（塚田 1973）に類似している。67～69の三角陰刻文、横走する沈線間に細線を施す文様は、十三菩提式の要素が変化したものとして当段階より新しくなると、東方第7遺跡（坂上 1974）では指摘しており、五領ヶ台式に含まれるとも考えられる。第11図2、70～85のS字状結節文が縦および横に施文される土器は、従来下小野式とされている土器であるが、現在では五領ヶ台式の粗製土器として考えられている土器である。

（青木美代子）

歴史時代の遺構として溝が検出されている。断面形は薬研形に近く、調査区を斜めに横断している。出土遺物から館、屋敷に伴う遺構と考えられ、溝より北側からも同時期の遺物の出土があったが、調査範囲内では建物跡らしき遺構は検出されなかった。溝には土塁は伴わなかったと考えられるが、近接する位置に柱穴跡が検出され、櫛・橋等何らかの付属施設の存在が想定される。

溝の遺物は各層から出土し、上層出土と下層出土遺物の接合がみられ、溝の埋設が短期間であった事をうかがわせる。また溝底に接する遺物はなく、溝の掘削後遺物が流れ込む間もなく土砂が流入し、以後溝が完全に埋没するまで断続的に遺物が投棄されたのであろう。

出土遺物は、土師質土器皿、内耳土器、擂鉢、陶融器、板碑、石臼、鉄製品等多彩であった。以下これらの中を簡単にまとめておく。土師質土器皿については大江氏の研究（大江 1980）があるが、本報告も氏の指摘事項を含めて観察を行った。その結果、数点の製品に粘土塊からの水挽とは考えにくい例があり、これらの製品は粘土紐巻き上げ後に輪轤整形を行なう方法によったと考えられる。内耳土器については各地で編年研究が行われ（中村 1979b、安田 1981、岩淵 1981）ており、本遺跡からは安田氏の分類でいう、鍋形とほうろく形が出土している。鍋形の製品は口縁部と体部の境で屈折し、ほうろく形の製品は内耳部分が口縁部内に収っており、白石城（中村 1979）、私市城（塩野 1981）、赤塚遺跡（岩淵 1981）、青戸葛西城（宇田川 1976）などに類似がある。ま

た内耳内側には、吊り下げる際に生じるであろう磨滅の痕跡は確認されなかった。擂鉢は焼成・形態が多種多様であり、近世以降と考えられる炻器質の製品を除いても、陶質・土師質・瓦質の製品があり、ここでも中世城館跡にみる一般的な出土様相を呈している。美濃産の擂鉢は県内各地で出土しているが、本遺跡出土と同様な口縁部形態を持つ例はみられず、千葉の小金城跡に類似がある。板碑は3点に文字・種子等が確認された。そのうちの1点には永正の年号(1504~1521)が刻まれていた。板碑は複数の個体が出土していることから、故意に破壊し(され)たと考えられるが、溝底より浮いた状態であるので、溝あるいは関連する造構の構築時でないことは確かである。しかし、この板碑の存在は、伴出する遺物の投棄時期が永正年間以後であることを示している。その他、鐵滓の出土は鍛冶、鉄物師の存在を予想させる。

以上簡単ではあるが、帆立遺跡出土の中世遺物についてまとめを行った。溝の時期については、板碑の廃棄や美濃産の擂鉢の形態から16世紀後半と考えられる。本遺跡周辺には中世～近世の城館が多い。江ヶ崎城をはじめ、黒浜に2カ所、馬込・閔戸・蓮田・平野・大宮市丸ヶ崎城・岩槻市岩槻城などが知られ(埼玉県教育委員会 1968)，歴史的事柄も多いが、残念ながらそこまで言及する余裕がない。

中・近世遺物に関して従来は明らかに城館跡とわかる場合を除いてあまり注意されず、中村氏が指摘するごとく(中村 1981)，「ガラクタ」として取り扱われ、採取されたとしても実測されない場合が多かった。しかし近年になってかなりの割合で中・近世遺物の報告が行われるようになり、中世～近代の遺物を主体とする報告もされている。

現在県内各地で中・近世遺跡の調査が行われており、122号国道内の別遺跡においても調査・整理を実施中で、これらの資料が集積した時点で改めて検討を加えてみたい。

(宮 昌之)

#### 引用・参考文献

- 岩淵一夫 1981『赤塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第36集  
宇田川洋 1976『青戸・葛西城址Ⅱ区調査報告』葛西城址調査会  
大江正行 1980『群馬県と周辺地域の中世土師質土器皿』『群馬考古通信』第7号 群馬県考古学談話会  
奥田直榮 1970『出土遺物』『大谷口』松戸市教育委員会  
小倉 均 1980『大間木内谷・和田西・吉場・井沼方遺跡発掘調査報告書』油和市遺跡調査会報告書第13集  
埼玉県教育委員会 1968『埼玉の館城跡』  
坂上克弘 1974『東方遺跡』港北ニュータウン地域内文化財報告Ⅲ  
塙野 博 1981『和市城跡』駒西町埋蔵文化財調査報告書第1集  
塙田明治 1973『横浜市宝ノ木遺跡』横須賀考古学研究調査報告 2  
中村倉司 1979 a『白石城』埼玉県遺跡調査会報告書第36集  
中村倉司 1979 b『内耳土器の編年とその問題』『土曜考古』創刊号 土曜考古学研究会  
中村倉司 1981『埼玉県の中・近世考古学』『土曜考古』第4号 土曜考古学研究会  
安田龜太郎 1981『中世土器と内耳土器』『野州史学』野州史学会  
山田瑞穂 1969『有明山社』長野県考古学会研究報告書 9

V

馬込新屋敷遺跡

## 1 遺跡の概観

馬込新屋敷遺跡は、東北本線蓮田駅の東南東約1.1 km、東北縦貫自動車道岩槻インターチェンジの北西約5 kmに位置し、元荒川と綾瀬川にはさまれた、南北に伸びる細長い台地上の東端に立地する。標高は12.5~14.0 mであり、現水田面との比高差は約4 mを測る。遺跡の南西側以外はおおむね台地の縁辺にあたる。

遺構としては、縄文時代早期の炉穴2基、弥生時代末~古墳時代初頭の堅穴住居址14軒、近世の堅穴遺構5基、溝12本などが検出された。

縄文時代早期の炉穴2基は、発掘区北端で検出され、そのうち1号炉穴から土器が若干出土している。確認された遺構はこれだけであるが、表土及び弥生時代以降の遺構から、早期の貝殻条痕文系土器、前期の織維土器、中期の加曾利E式土器等が若干量検出された。縄文時代の主な遺構は発掘区域外に広がっていると考えられる。

弥生時代末~古墳時代初頭の堅穴住居址は14軒検出された。そのうち13軒は発掘区域の南半部に占置し、1号住居址のみがやや北に離れて存在している。しかし、この空間部はかなり攪乱を受けしており、まったく遺構がなかったとは言い切れない。また、発掘区の北東・南東側は台地の終わる急斜面になっているので、本集落は元荒川に向って東に張り出した舌状台地の先端部に占置されていたことがわかり、1・4・14号住居址を結ぶラインが集落の北~東限であったと考えられる。14軒のうち重複関係にあるのは1例だけで、12号住居址が13号住居址を切っている。しかし、10・11・13号住居址などかなり近接するものも見受けられ、少なくとも2回以上の建て替えが行なわれた集落であると考えられる。

住居址のプランは、すべて隅丸方形を呈する。規模は6号住居址の3.6 m×3.9 mが最小で、3号住居址の6.8 m×(6.2)mが最大である。主軸方向は、炉・貯藏穴の位置関係などから求めたが、北より數10度東に振れるものが多く、さら遺跡とは性格を異にするようである。炉址はほとんどの住居址で確認され、いずれも地床炉であった。壁溝・柱穴・貯藏穴はいずれもわずか数軒の住居址で確認されただけである。これもさら遺跡と異なる点である。床はほぼ一様に堅くしまっており、貼り床を形成するものが多い。また8号住居址からは、大量の焼土と炭化材が検出されている。その北隣の7号住居址からも焼土が集中して大量に検出された。何らかの関連が考えられるかもしれない。

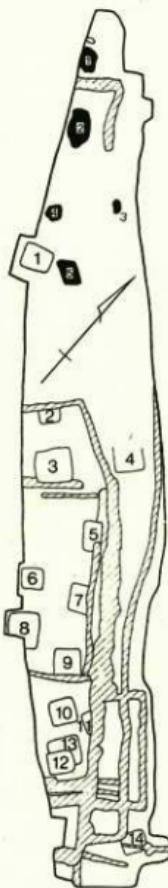
遺物は、弥生時代末~古墳時代初頭の壺・甕・高杯・器台・塊などが出土している。中でも2・3号住居址などでは、多くの土器が床面直上などの良好な状態で検出された。2号住居址からは、吉ヶ谷式の壺が1点出土している。また、土玉の出土も顕著であり、3・5・8・12・14号住居址で検出されている。中でも8号住居址からは大量に出土し、その数は14点である。

近世の堅穴遺構は発掘区域の北端でまとまって検出された。5基のうち、3・5号堅穴遺構は、ほぼ全面赤く酸化して、固くしまっている。遺物としては5号堅穴遺構から幕末~明治初頭の染付・燈明皿・擂鉢などが出土した程度で、他からはたいして検出されなかった。

溝は12本検出されたが、1号溝のみ発掘区北端に位置し、他は南半部に集中する。南半部11本の

うち、中央部を北西～南東に走る2・3号溝は、断面形が薬研状で、深さも他の溝に比べて深い。また、遺物も、内耳土器片や陶磁器片などが検出されている。1号溝はL字形を呈し、多量の焼土・炭化材とともに、藍甕2個、石臼3個、瓦片・壁片・陶磁器片などが一括採取されていた。屋敷等の火災後の処置によるものと推察される。

(藤原 高志)



第124図 馬込新屋敷遺跡全測図  
(1:1000)

## 2 発掘調査の経過

馬込大原遺跡の調査が終了し、引き続き昭和55年2月1日から新たに馬込新屋敷遺跡の調査に入った。とりあえず、表土剥ぎは調査区の南半部分に限って対象としたが、多くの溝状遺構の存在と住居址を示す方形の黒色の落ち込みが次第に姿を現わはじめ、集落跡であることが明瞭となつた。表土剥ぎの実施中は併行してグリッドの設定をおこなつた。

遺構の調査は、溝を掘りあげることからスタートした。2号溝は南半では最も幅が広く、深さもあり、断面形態は薬研掘状を呈していた。覆土からは内耳土器などが出土した。調査した溝にもいくつかのバラエティーがあり、時間的な新旧も当然のことながら予想された。これらの溝に切られた住居址としては、2, 3, 5, 7, 9, 11, 14号住の計7軒が認められた。

住居址は、全て方形を呈し、全体的に遺物の出土量が多いとは言えなかつたが、昭和54年度の最後の調査対象となつた、やや大形の3号住居址からはまとまった土器の出土がみられた。8号住居址は床面が真赤に焼け多くの焼土、炭化材が遺存していた。

なお、住居址同志で切り合いの関係にあるのは12・13号住居址についてだけで、調査の進行には支障がなく、順調に実施されたのは幸いだつた。

昭和55年度は4月7日から再び調査に入った。昨年度調査した住居址、溝の実測も同様に再開した。表土剥ぎは、残された調査区の北半部分について実施する。4号住居址の検出された付近から北方にかけては擾乱が激しく、遺構の確認に手間どつた。さらに1号住居址を含めた付近は、北方に向けて台地に若干の傾斜がつきはじめているが、そのあたりは、表土下に再堆積のローム土が厚くかぶつており、表土剥ぎには多大な困難がともなつた。従つて、遺構の確認作業が完了したのはほぼ2ヶ月後の5月29日であった。

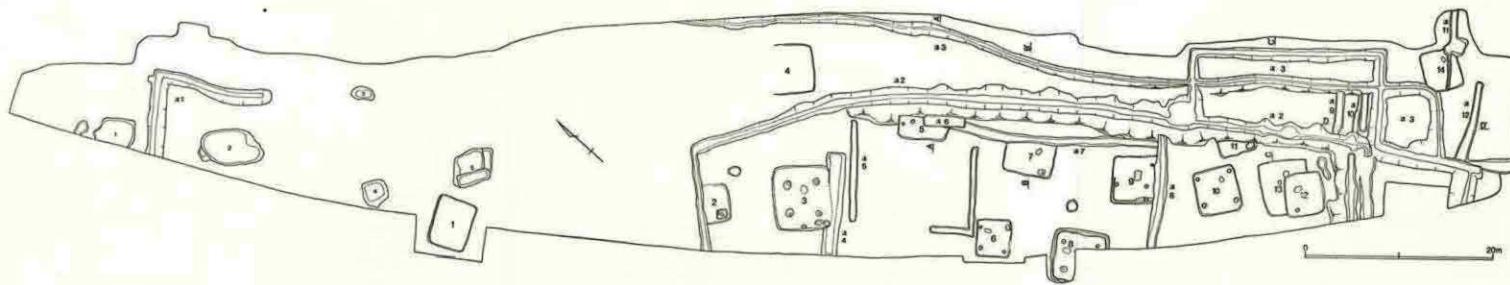
遺構は6月2日から掘りはじめた。

1号溝とした調査区の最も北方で検出された溝からは、夥しい焼土、炭化物、灰に混じり、石臼や藍瑠璃、瓦、布片等が出土した。近世遺構と考えられる。1号溝の北西には縄文時代早期の炉穴が2基確認され、6月10日に調査に入った。

住居址に関しては6月11から本格的な発掘に入った。対象となった住居址は1, 2, 4号住の3軒であり、それぞれ十字ベルトを残し掘りはじめた。堅穴遺構についても順次掘りはじめた。

以上の作業の過程を経て、遺物・遺構の写真撮影、実測、さらに遺物の取り上げ等が7月18日をもって完了した。

(鈴木 敏昭)



第125圖 馬込新屋敷遺跡全測圖

### 3 遺構と出土遺物

#### (1) 縄文時代の遺構と出土遺物

縄文時代早期の炉穴 2 基と多時期にわたる遺物が少量ずつ出土したにすぎない。

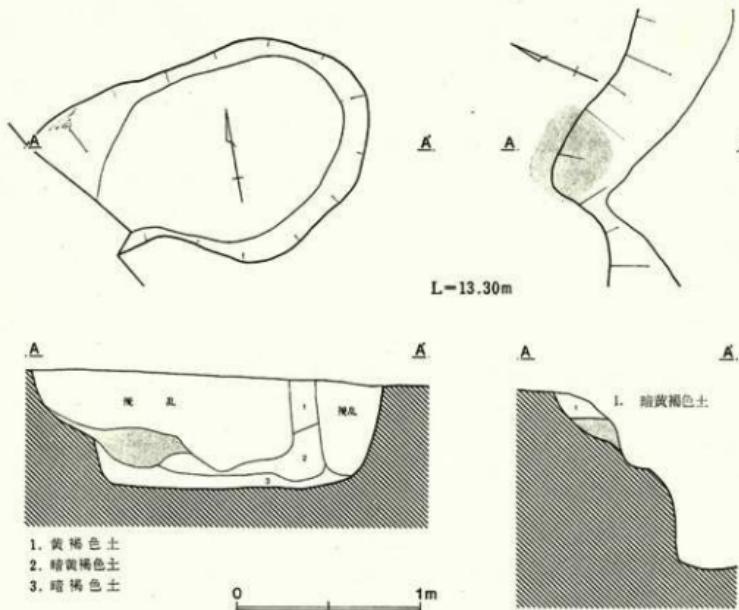
##### 遺構

###### 1号炉穴（第126図1）

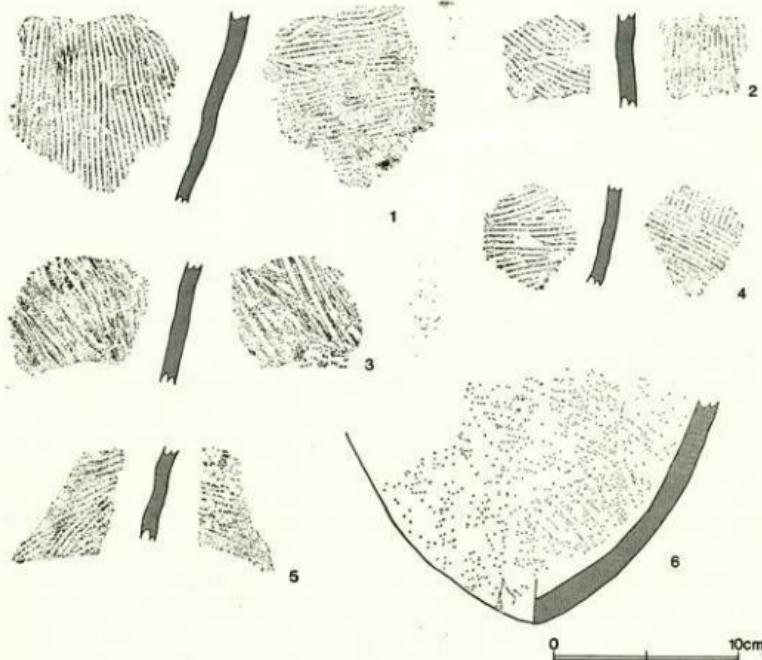
炉床部が若干調査区外にあるため未調査である。長径 1.90 m、幅 1.10 m の大きさである。擾乱が激しいが黄褐色土、焼土、暗黄褐色土、暗褐色土の 4 層に分層された。覆土中より縄文早期の貝殻条痕文土器の出土があった。出土遺物およびグリッド出土土器より野島期の所産であろう。

###### 出土土器（第127図 1～6）

1～5 は表裏とも条痕を施している。1・2・4 は表裏ともかなり丁寧に貝殻条痕が施されている。色調は表が黒褐色、裏が暗褐色を呈する。胎土には若干繊維と細砂を含む。焼成は当時期のものとしては良好である。3 はかなり大きい貝殻を施文具としており、表裏とも幅広い条があらわれている。色調は暗褐色で、胎土には多量の繊維を含んでいる。5 の裏は荒れており条痕があまり明瞭ではない。表はしっかりととした条痕が施文される。6 は底部であり丸底である。表裏とも条痕が



第126図 1-2号炉穴



第127図 1号炉穴出土土器

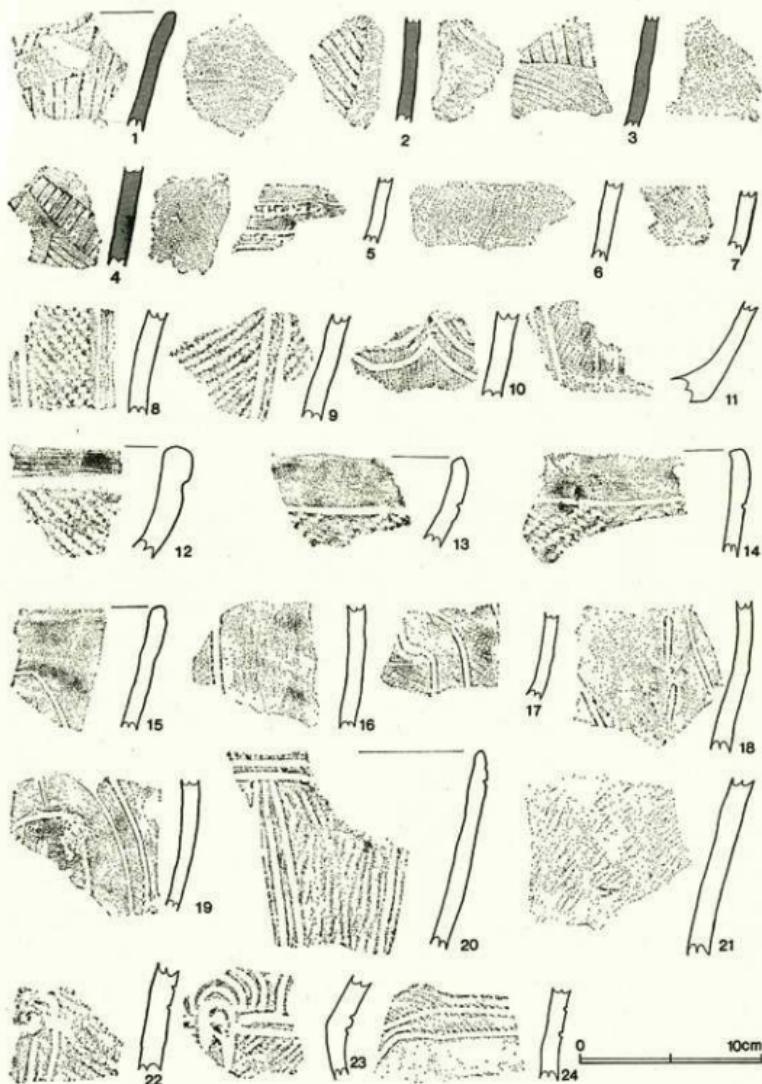
施文される。色調は黄褐色であり、部分的に黒くすすけている。胎土には若干の繊維と小砾を含む。焼成は良好である。

2号炉穴（第126図2）

1号竪穴造構により壊されており、全体は不明である。焼土を検出したにすぎない。土層は上層より暗黄褐色土で焼土が若干混じる層と焼土層の2層に分層できた。遺物は全く出土しなかった。

グリッド出土土器（第128図1～23）

1～4は縄文早期野島式の口縁部破片である。細隆起線文による幾何学的な文様構成を取っている。1はゆるい波状にならうか。黄褐色、焼成良好である。5は口縁下に半截竹管状工具による平行沈線を施し、その間に爪形文を充填するものである。胎土には多量の繊維を含み、黒褐色を呈する。黒浜式であろう。6は口縁直下の破片であり、単節LRの縄文が残る。色調は黄褐色、諸磯a式であろう。7は脚部片で、半截竹管状工具による格子目状文を施している。色調は黄褐色、焼成は良好である。諸磯c式にあたる。8は懸垂文を有する加曾利E式・縄文中期Ⅲ期（谷井他 1982）の脚部破片である。沈線間の複節斜縄文LRLは磨消されている。色調は黄褐色。9は二本の懸垂文を持ち、地文としてRLの縄文を施している。10は三本1組の弧線を描く加曾利E式・縄文中期Ⅲ期の連弧文土器である。色調は茶褐色、胎土は小さな砂粒を含み極めて良好である。11は底



第128図 グリッド出土土器

部の破片。二本の懸垂文間に縄文 RL を施文する。12 は口縁直下に沈線を施し、以下 RL 縄文を施文する。13・14 は同一破片かも知れない。口縁部直下を無文にし、以下沈線、LR 縄文を施文している。中期最終末か後期初頭の土器である。色調は黄褐色、胎土に小礫を含む。焼成は普通。15～19 は後期初頭の土器である。沈線間を縄文、又は列点文により充填するものである。19 のように縄文がほとんど見えないものもある。20～23 は掘之内 1 式であろう。20 は縄文を施した後、口唇直下に二本、胴部に三本沈線による懸垂文を施している。器形は口唇上をつまみ上げたような本時期特有の形態を持っている。21 は LR 縄文を粗雑に器面全体に施している。22 は LR 縄文を施し、沈線を描くものである。

(大塚 孝司)

## (2) 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物

## 1号住居址（第129図）

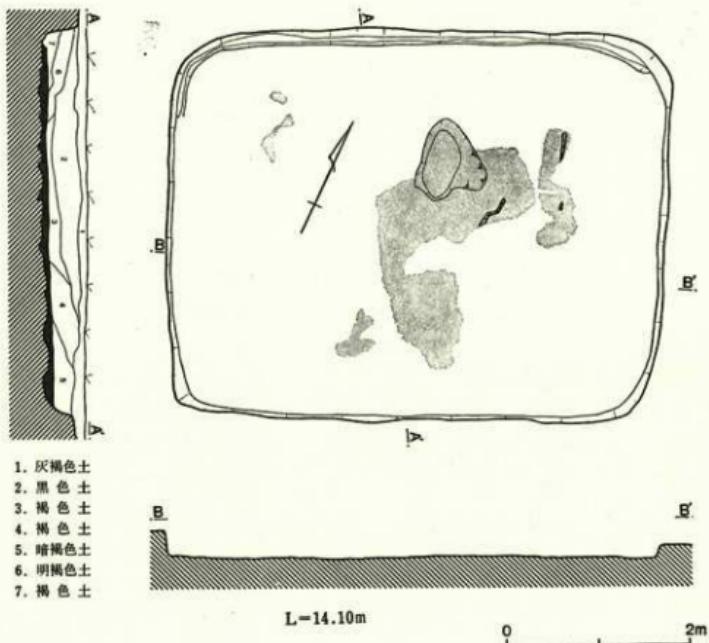
本遺構中最北西端に位置し、これ以北は沖積台地縁辺部まで該期の遺構がないため、集落の北端の住居址と考えられる。また他の13軒は比較的まとまって検出されたのに対し、1号住居址のみグループから離れた形で存在する。4.2m×5.5mの横に長い隅丸方形を呈し、主軸方向はN-25°-Wである。ローム面から床面までの深さは東壁と南壁が浅く15~20cm、北壁と南壁が30~35cmであり、壁はやや傾斜して立ち上がる。壁溝は北壁際のみに見られる。炉は地床炉でその中心は住居址の対角線の交点から方向角30°、距離90cmに位置する。不整形を呈し、炉の東側及び南側に焼土が広がっている。炭化材も見られる。遺物はすべて覆土からの出土である。

## 1号住居址出土土器（第130図）

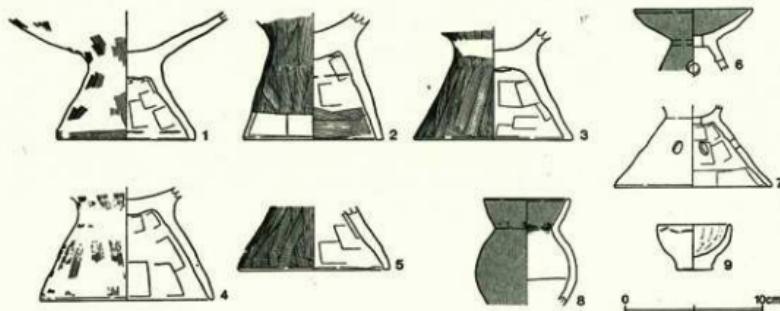
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	底径 9.9	脚部直線的に開き、端部で内側に屈曲する。	外面ハケ整形後、部分的ヨコナデ。内面工具によるナデ。にぶい赤褐色。	
台付甕	2		脚部直線的に開く。	外面ハケ整形後、下端部ヨコナデ。内面工具によるナデ。にぶい褐色。	
台付甕	3	底径 11.3	脚部やや外反気味に開く。	外面ハケ整形後、くびれ部ヨコナデ。内面工具によるナデ。にぶい赤褐色。	
台付甕	4		脚部やや内弯気味に開く。	外面タテハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。胎土砂っぽい。にぶい橙色。	
台付甕	5	底径(10.9)		外面ハケ整形。内面工具によるナデ。にぶい褐色。	
器台	6	口径 8.3	器受部内弯気味に立ち上がり、丸い口唇部に至る。脚部4孔。	内外面ともナデか。胎土砂っぽい。内外面とも丹彩。明赤褐色。	
器台	7		脚部直線的に開く。6孔と考えられる。	外面タテヘラ磨き。にぶい赤褐色。	
増 (小型甕)	8		頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部内弯気味に立ち上がり丸い端部に至る。胴部球形。	外面ヨコヘラ磨き。口縁部内面ヨコヘラ磨き。口縁部内面～外面丹彩。にぶい赤褐色。	
手捏 土器	9	口径 5.2 底径 2.4 器高 3.4	体部内弯して立ち上がり口縁部ではほぼ直立。	内面工具によるナデが施される。にぶい褐色。	完存。

## 2号住居址（第131図）

1号住居址の南東約24mに位置し、北西半分を2号溝に切られる。主軸方向の幅は3.8mで、

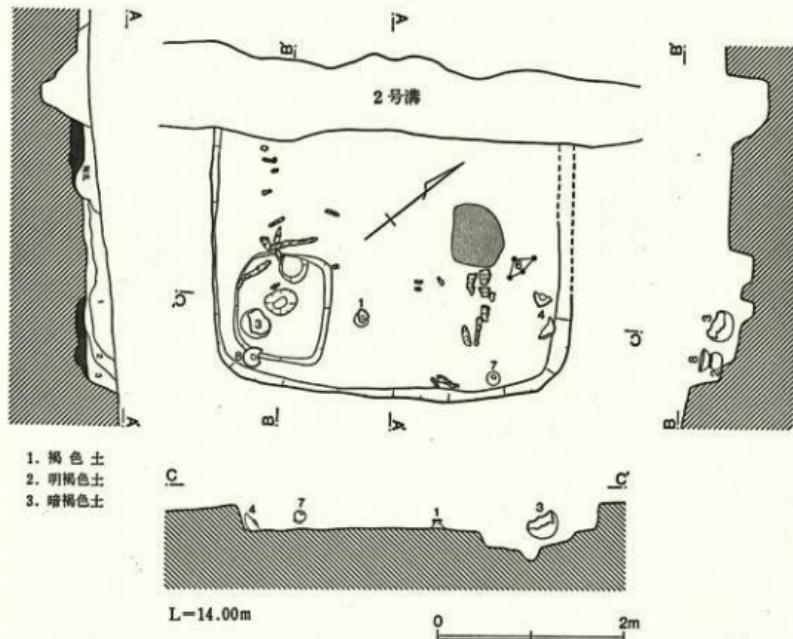


第129図 1号住居址



第130図 1号住居址出土遺物

主軸方向は N-41°-E である。ローム面から床面までの深さは約 30 cm で、壁はやや傾斜して立ち上がる。炉は地床炉で北東壁寄りで検出された。南コーナー際で 100 cm × 115 cm の隅丸方形を呈し、深さ約 20 cm のピットが検出された。この中にさらに深さ 15 cm 前後の円形小ピットが 2 個穿たれている。遺物は 1・2・4 が床面直上から検出され、他は覆土からのものである。このうち 2 壺と 8 高杯は組み合って出土した。貯蔵穴の中から、若干浮いた状態で 3 壺が検出された。土器以外では炭化材が炉の南東側・貯蔵穴の北西側から出土している。



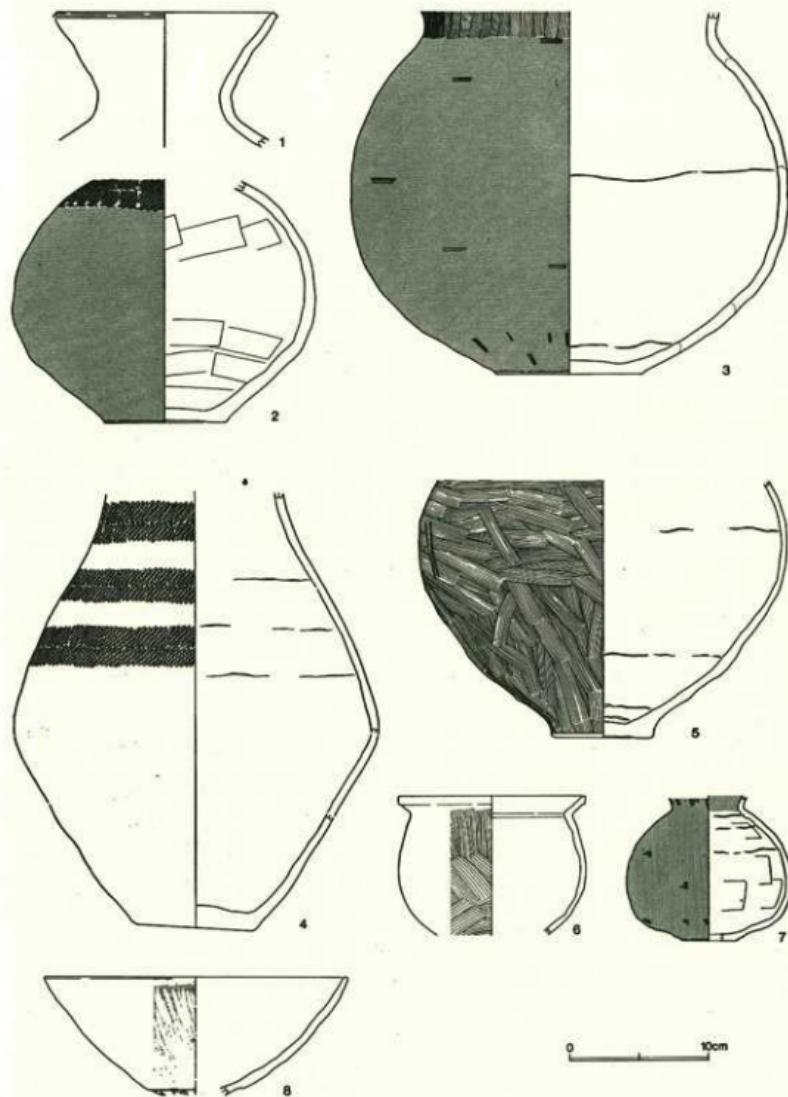
第 131 図 2 号住居址

## 2号住居址出土土器（第132図）

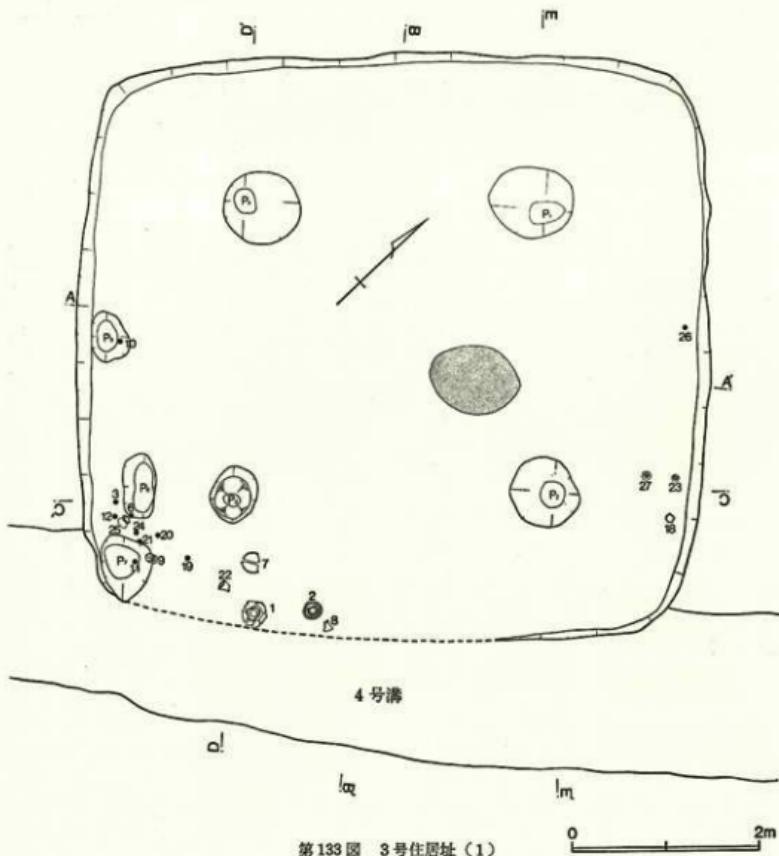
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 15.8	頸部緩やかに屈曲し、口縁部は直線的に伸びた後やや内窓気味に端部に至る。平坦な口唇部外面に浅い沈線。	口縁部内外面ともタテヘラ磨き。明赤褐色。	床直。
壺	2	胴径 21.8 底径 8.8	ほぼ球胴で最大径は中位に存す。胴下半は直線的に底部に至る。	肩部に2段の縄文帯。上段RL単節、下段LR単節でそれぞれの下端にS字状結節文。胴部外面タテヘラ磨き、丹彩。胴部内面工具によるナデ。	胴部完存。8と組み合って出土。床直。
壺	3	胴径 31.5 底径 10.5	頸部緩やかに屈曲。胴部偏平な球形を呈しそのまま底部に至る。	頸部タテハケ。胴部内外面ともヨコヘラ磨き。外面丹彩。	
壺	4	底径 8.8	吉ヶ谷式。頸部などらかに外下方にのび、胴部はあまり張らない。胴部下位も直線的に底部に至る。平底。	肩部にLR単節縄文を2段連ねた縄文帯を3本有す。他はヘラ磨き。胎土もろく、白色微砂粒を多量に含む。暗赤褐色。	床直。
甕	5	胴径(26.6) 底径 6.9		胴中位ヨコ、下位タテの細かいハケ整形。内面工具によるナデ後下位タテヘラ磨き。	
小型甕	6	口径(13.3)	頸部「く」の字状に屈曲しやや内窓気味に端部に至る。口唇部外面は幅5mmほどの垂直な面をなす。	胴部外面粗いハケ整形。口縁部ヨコナデ。	
壺 (小型甕)	7	胴径 11.8	下彫れで胴部最大径をやや下位に有す。頸部は「く」の字状に屈曲。	外面ヨコヘラ磨き。内面工具によるナデ。外面～口縁部内面は丹彩。	
高杯	8	口径 21.7	杯部やや内窓気味に開く。口唇部平坦な面をなす。杯部底部に緩い棱をもつ。	外縁細かいヨコハケ後ナナメヘラ磨き。内面ヨコナデ後ヘラ磨き。	杯部ほぼ完存。2と組み合って出土。

## 3号住居址（第133図）

2号住居址の南東5.5mに位置し、南東壁を4号溝に切られる。大きさは6.8m×6.2mで本遺跡中最大の規模をもつ住居址である。隅丸方形を呈し、主軸方向はN-44°-Eである。ローム面から床面までの深さは40~50cmと比較的深く、壁はやや傾斜して立ち上がる。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角25°、距離90cmに位置し、主軸方向に長い椭円形を呈する。ピットは主柱穴が4個ほぼ住居址の対角線上で検出された。深さはP<sub>1</sub> 80cm, P<sub>2</sub> 70cm, P<sub>3</sub> 65cm, P<sub>4</sub> 80cmといずれも深い。これ以外には北西壁際に3個検出されたが、貯蔵穴ほど大きいものではなく、いずれも用途不明である。土器は大部分が南コーナー際から検出された。そのうち1・2・3・6・7・8・9・10・12・20・21・22・24・25が床面上からの出土である。11は



第132図 2号住居址出土遺物

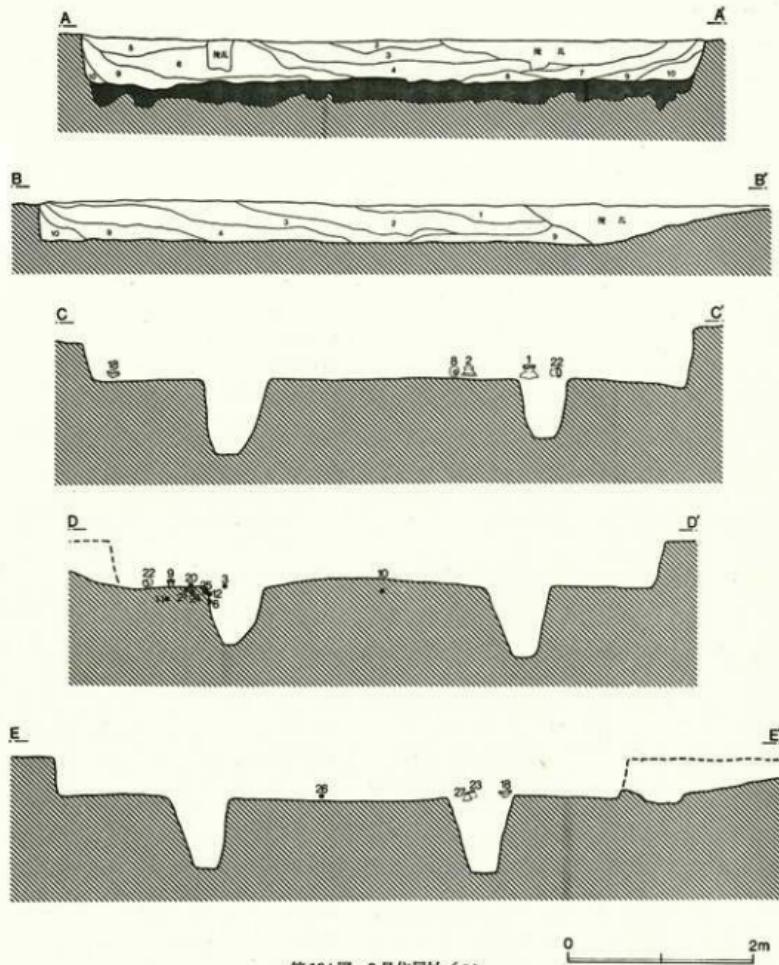


第133図 3号住居址(1)

P<sub>7</sub> 内から検出された。北東壁際からは18・23・26・27がいずれも床面直上で検出された。

### 3号住居址出土土器 (第135・136図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径(16.2)	頸部緩やかに屈曲し、口縁部外反気味に開き、平坦な口唇部に至る。	肩部にR L 単節繩文による2段の繩文帯を有し、それ以下の下端にS字状結節文。下段繩文帯の下にはさらに3段のS字状結節文が付加。上段に網目状燃系文がわずかに見られる。下段は円形朱文が11個施される。口唇部及び口縁部内面上端にもR L 単節繩文・	床直。

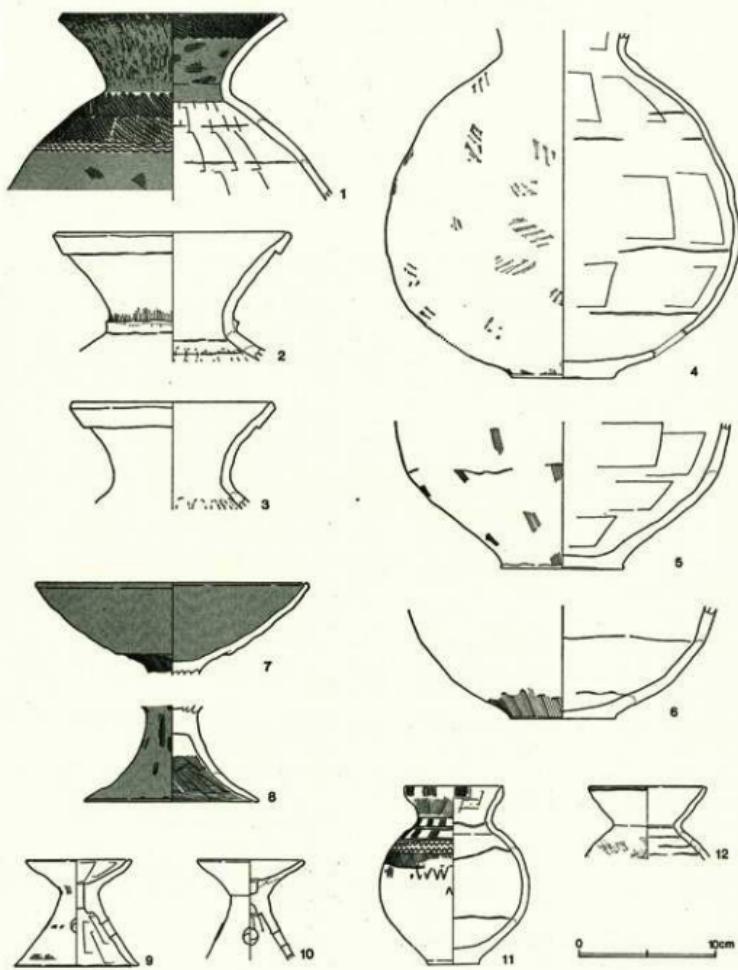


第134図 3号住居址(2)

0 2m

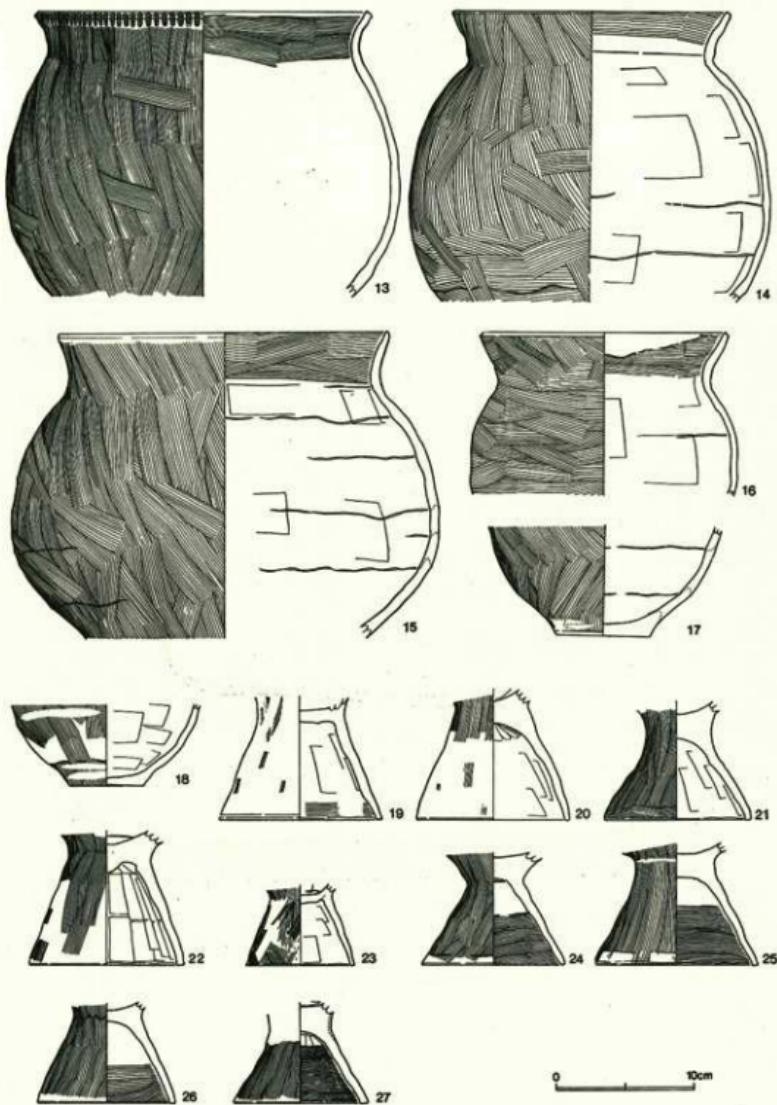
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	2	口径 16.5	頸部緩やかに屈曲し、口縁部	円形朱文が施される。これら以外の外面及び口縁部内面の部位はハケ整形後ヘラ磨き・丹彩。胴部内面は工具によるナテ。にぶい橙色。白色微砂粒を含む。	口縁部完存。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			やや外反気味に開く。折り返し口縁。頸部外面に粘土細凸帯を有す。	残すも、他は丁寧なヘラ磨きが施される。肩部内面指圧痕。にぶい橙色。	床直。
壺	3	口径(14.5)	頸部緩やかに屈曲し、口縁部外反気味に開き、折り返し部でやや内弯。	外面ナデ、内面ヘラ磨き。肩部内面に指圧痕。にぶい赤褐色。	床直。
壺	4	胴径(26.1) 底径 7.4	頸部緩やかに屈曲。胴部最大径やや下位に存す。平底。	外面ハケ整形後ヘラ磨き。内面工具によるナデ。橙色。	
壺	5	底径 (8.9)	平底	外面ハケ整形後粗いヘラ磨き。内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	
壺	6	底径 7.4		外面ハケ整形後タテヘラ磨き。底部木乗度。内面工具によるナデ。にぶい赤褐色。	床直。
高杯	7	口径 19.3	杯部やや内弯気味に開き、丸い端部に至る。杯部底部に緩い棱をもつ。	杯部内外面とも丁寧なヘラ磨き・丹彩。脚部との接合部にタテハケが残る。口唇部ヨコナデ。にぶい褐色。	床直。
高杯	8	底径 12.5	脚部外反しながら開き比較的鋭い端部に至る。	外面タテハケ後丁寧なタテヘラ磨き・丹彩。内面ハケ目が残る。	床直。
器台	9	口径 7.9 底径 8.8 器高 7.8	器受部内弯気味に開き、丸い口唇部に至る。脚部や外反気味に開く。4孔。接合部長い。	外面ヘラ磨き。器受部上半はヨコナデ。内面は工具によるナデ。にぶい橙色。	床直。
器台	10	口径 7.4	器受部や内弯気味に開き丸い口唇部に至る。脚部4孔。接合部上下から穿つも貫通せず。	器受部内外面ともヨコナデ。	床直。
小型壺	11	口径 7.1 胴径 10.9 底径 3.5 器高 13.1	頸部2段に屈曲し、口縁部や外反して立ち上がった後内弯して鋭い口唇部に至る。胴部ほぼ球形で最大径中位に存す。平底。	外面ハケ整形後ヘラ磨き。内面工具によるナデ。肩部文様帶は横位の沈線により5段に分けられ、上2段が数本単位の平行沈線による文様、3段目が2段の連続鉗齒文、4段目が複合鉗齒文、5段目が連続鉗齒文。5段目はヘラ磨きにより一部磨滅。口唇部外側にも7~9本単位の平行沈線文が施される。にぶい黄橙色。	
(小型壺)	12	口径 8.2	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部や内弯気味に立ち上がり、丸い口唇部に至る。	口縁部内外面ともヨコナデ。	床直。



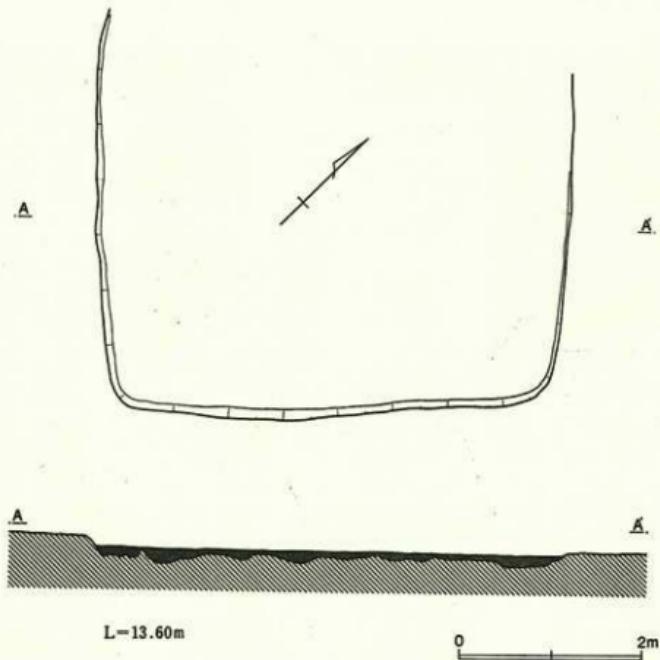
第135図 3号住居址出土遺物(1)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	13	口器(24.0)	頸部緩やかに屈曲し、口縁部外反気味に開く。口唇部外面ハケ状工具による刻み目。	外面タテヘナナメハケ整形。 内面口縁部ヨコハケ、胴部ヨコナデ。橙色。	
甕	14		頸部2段に屈曲し、口縁部外反気味に開き、平坦な口唇部に至る。	外面タテヘナナメハケ整形。 内面口縁部ヨコハケ、胴部工具によるナデ。にぶい褐色～赤色。	
甕	15	口径(23.7) 胴径(31.1)	頸部2段に屈曲し、口縁部外反気味に開き、平坦な口唇部に至る。偏平な球胴で最大径や下位に存す。	外面タテヘナナメハケ整形。 内面口縁部ヨコハケ、胴部工具によるナデ。明赤褐色。	
甕	16		頸部2段に屈曲し、口縁部や内湾気味に開き、平坦な口唇部に至る。	外面ヨコヘナナメハケ整形。 内面工具によるナデ。赤褐色。	
甕	17	底径 6.8	平底。	外面タテヘナナメハケ整形。 内面工具によるナデ。赤褐色。	
甕	18	底径 5.3	平底。	外面粗いハケを部分的にヘラ磨きにより消す。内面工具によるナデ。	床直。
台付甕	19	底径 11.1	脚台部ほぼ直線的に開く。脚台部天井はほぼ平坦。	外面タテハケ後タテヘラ磨き。内面工具によるナデ。にぶい赤褐色。	
台付甕	20	底径 10.8	脚台部内湾気味に開く。	外面タテハケ後タテ方向のナデ整形。内面工具によるナデ。砂っぽい。	床直。
台付甕	21	底径 10.2	脚台部内湾気味に開く。	外面タテハケ、裾部ヨコハケ、内面工具によるナデ。赤色。	床直。
台付甕	22	底径 11.5	脚台部直線的に開く。天井部にヘソを残す。	外面タテハケ、内面工具によるナデ。径1mm弱の砂粒を大量に含む。にぶい橙色。	床直。
台付甕	23	底径 7.7	脚台部内湾気味に開く。	外面タテヘナナメハケ、内面工具によるナデ。橙色。	床直。
台付甕	24	底径 9.6	脚台部直線的に開く。	外面タテハケ整形。内面ヨコハケ後、上半ヨコナデ。にぶい赤褐色。	床直。
台付甕	25	底径 11.2	脚台部直線的に開く。	外面タテハケ後裾部ヨコナデ。内面ヨコハケ。明赤褐色。	床直。
台付甕	26	底径 10.4	脚台部内湾気味に開く。	外面タテハケ後裾部ヨコナデ。内面ヨコハケ後上半工具によるナデ。灰褐色。	床直。

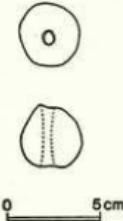
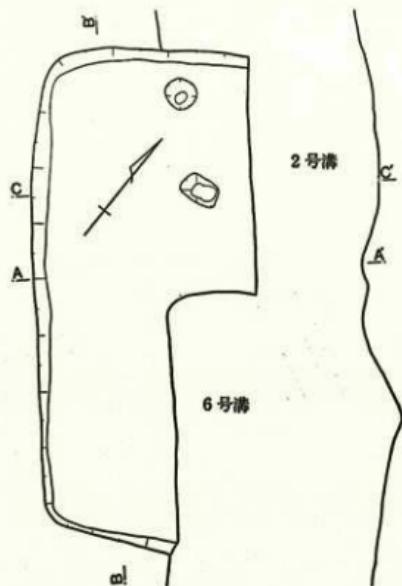


第136図 3号住居址出土遺物(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	27	底径 8.7	脚台部やや外反気味に開く。	外面タテハケ後上部ヘラ磨き。内面ヨコハケ。にぶい黄橙色。	床直。

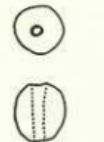
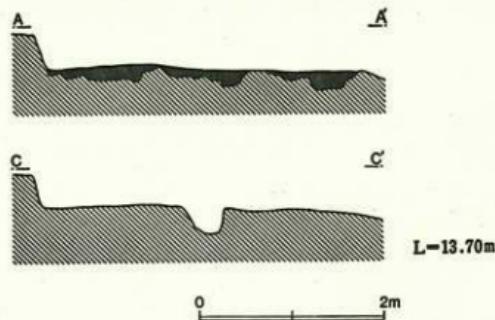


第138図 4号住居址



第137図 3号住居址  
出土遺物(3)

上記土器以外に土玉が1個検出されている(第137図)。ほぼ球形を呈し、長さ3.2cm、最大胴径3.4cm、重量28.9gである。にぶい黄橙色。



第140図 5号住居址  
出土遺物

第139図 5号住居址

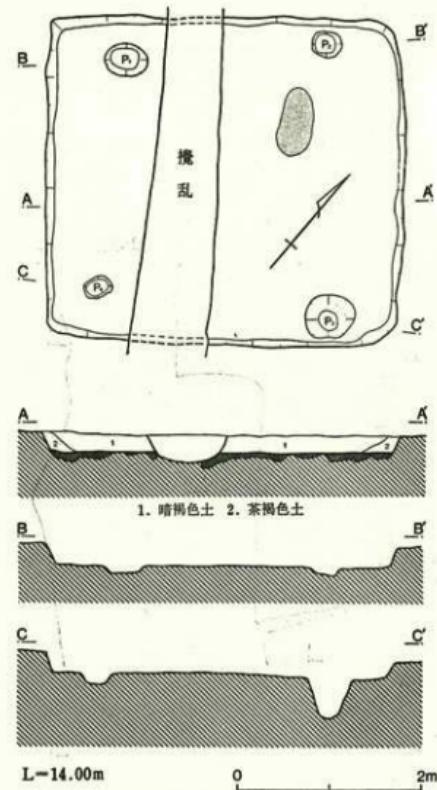
#### 4号住居址（第138図）

3号住居址の北東 7.5 m に位置する。北東～南西方向の長さ 4.7 m で、この方向を主軸方向とすると、N-43°-E である。ローム面から床面までの深さは南東壁で 10 cm で、北西に向かうほど浅くなり、北西壁は検出されなかった。床面はほぼ全面、黒色土とロームの混合土による貼り床で、炉・貯蔵穴・柱穴などの付属施設は検出されなかった。

#### 5号住居址（第139図）

3号住居址の東 8 m、4号住居址の南 10 m に位置し、北東半分が 2・6 号溝に切られている。北西～南東方向の長さ 5.4 m で、この方向を主軸方向とすると N-39°-W である。ローム面から床面までの深さは 30～40 cm で、壁はやや傾斜して立ち上がる。円形の小ピットが 2 個検出され、深さは 30 cm 前後であるが、いずれも性格不明である。

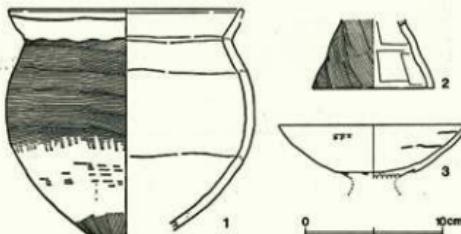
遺物は土玉が 1 個検出されたのみである（第140図）。俵形を呈し、長さ 3.1 cm、最大胴径 2.7 cm。にぶい橙色。



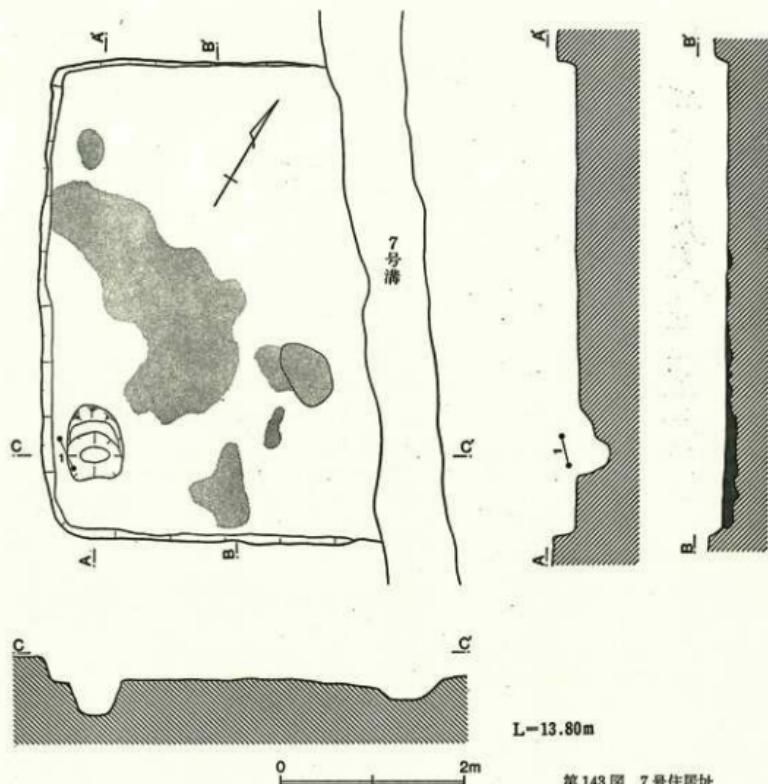
第141図 6号住居址

#### 6号住居址（第141図）

5号住居址の南 9 m に位置する。3.6 m × 3.9 m の隅丸方形を呈し、主軸方向は N-40°-W である。ローム面から床面までの深さは 20 cm 前後である。壁は傾斜して立ち上がる。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角 43°、距離 105 cm に位置する。長軸方向に長い椭円形を呈する。ピットは主柱穴が 4 本、住居址の対



第142図 6号住居址出土遺物



第143図 7号住居址

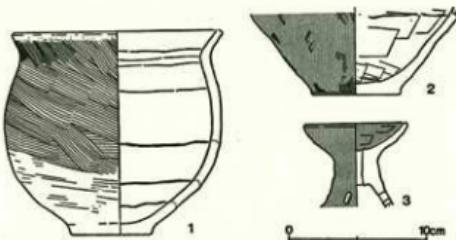
角線よりやや内側で検出された。深さは  $P_1$  10 cm,  $P_2$  10 cm,  $P_3$  40 cm,  $P_4$  13 cm で,  $P_3$  のみ深く、また  $P_3$  は他の 3 個に比べてその規模も大きい。遺物はいずれも覆土からの出土である。

## 6号住居址出土土器 (第142図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	口径 16.9 胴径 18.2	頸部「く」の字に屈曲し、口縁部内窩気味に開く。口縁上端に幅 5 cm 前後の輪積痕を残す。口唇部平坦。胴部はほぼ球形で最大径は中位に存す。脚台部直線的に開く。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面上半はヨコハケ、下半はナナメヘラ磨き。内面上半ヨコナデ、下半ヘラ磨き。灰褐色～黒褐色。	
台付甕	2	底径 (8.7)		外面ナナメハケ整形。内面工具によるナデ。にぶい褐色。	
高坏	3	口径(13.6)	坏部内窩気味に開き、丸い口唇部に至る。坏底部に棱をもつ。	内外面ともヘラ磨き整形。にぶい褐色。	

## 7号住居址（第143図）

5号住居址の南東 6.5 m, 6号住居址の東 5 m に位置する。東半分を 7号溝に切られる。北西～南東方向の長さ 5.2 m で、炉の位置から、これと直交する方向を主軸方向と考えると、N=58°—E である。ローム面から床面までの深さは 20～25 cm で、壁はやや傾斜して立ち上がる。炉は地床炉で、住居址の中心より東寄りに位置する。東西に長い椭円形を呈する。炉の西側及び南側にかけて広範囲にわたって焼土が広がっている。ピットは南コーナー際で 1 個検出された。60 cm×80 cm の不整椭円形を呈し、2段掘りで深さは約 35 cm である。炉址との位置関係から貯蔵穴とも考えられる。遺物はいずれも覆土からの出土である。



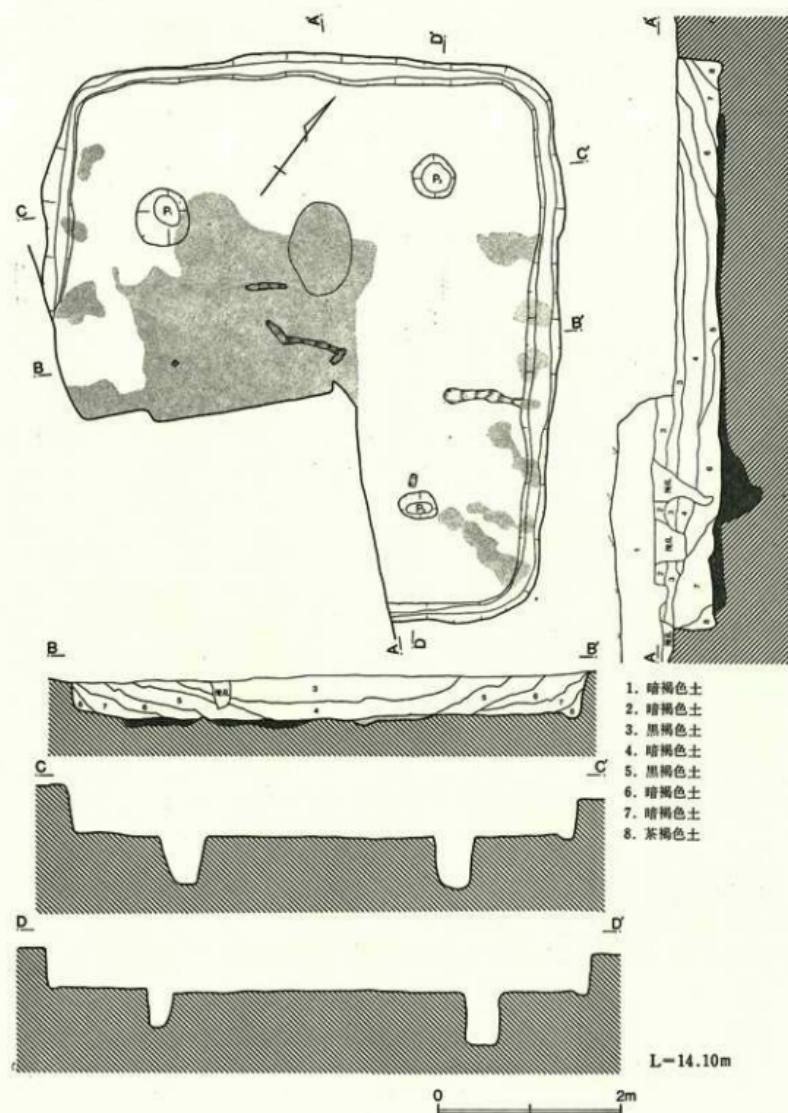
第144図 7号住居址出土遺物

## 7号住居址出土土器（第144図）

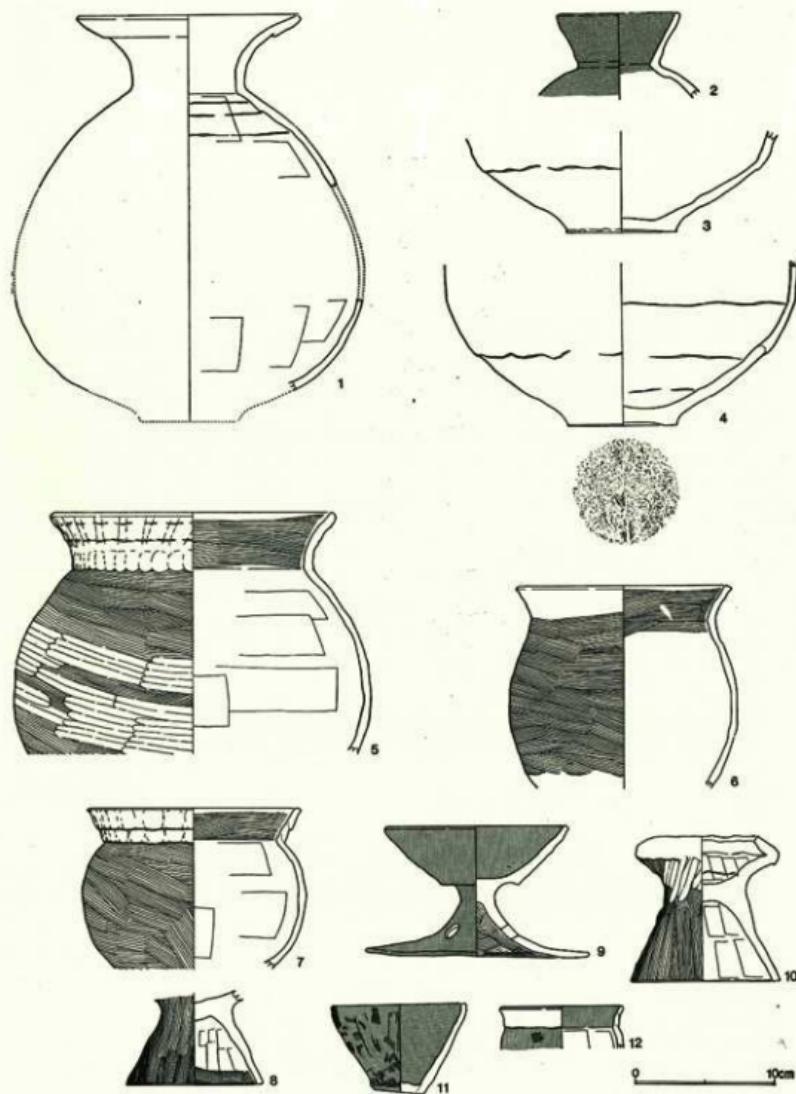
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 14.7 胴径 15.7 底径 5.8 器高 14.8	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開き平坦な口唇部に至る。やや長胴。平底。	外面タテ～ナナメハケ整形後、口縁部上半・胴部下半ヨコナデ。口縁部内面ヨコヘラ磨き。胴部内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	
壺	2	底径 5.5	平底。	外面タテハケ整形後タテヘラ磨き・丹彩。内面工具によるナデ。灰褐色。	
器台	3		器受部内湾気味に開き丸い口唇部に至る。接合部長い。脚部 3 孔。	外面ヘラ磨き・丹彩。器受部内面ヨコナデ・丹彩。にぶい橙色。	

## 8号住居址（第145図）

6号住居址の南東 4.5 m に位置する。南角 4 分の 1 が発掘区域外にかかる。6.1 m×5.6 m の隅丸方形を呈し、主軸方向は N=38°—W である。ローム面から床面までの深さは 40～50 cm で比較的深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は住居址の確認された範囲では全周し、幅は 15～20 cm、深さ約 5 cm である。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角 17°、距離 120 cm に位置する。主軸方向に長い椭円形を呈し、長径 100 cm、短径 70 cm である。ピットは主柱穴が 3 本、ほぼ住居址の対角線上で検出された。深さは P<sub>1</sub> 50 cm, P<sub>2</sub> 55 cm, P<sub>3</sub> 40 cm である。遺物はいずれも覆土からの出土であるが、おびただしい量の焼土と炭化材が検出された。特に



第145図 8号住居址

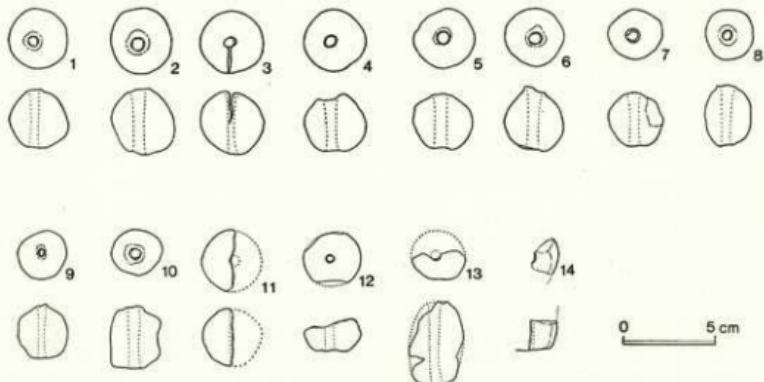


第146図 8号住居址出土遺物(1)

炉址の南側は床上に焼土がびっしり広がっていた。

8号住居址出土土器（第146図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 15.6	頸部2段に屈曲し、口縁部外反気味に開く。折り返し口縁で口唇部は平坦。	外面ともヘラ磨き整形。折り返し口縁部はヨコナデ。胴部内面は工具によるナデ。にぶい黄橙色。	
壺 (小型壺)	2	口径 (8.3)	頸部「く」の字状に屈曲し内側に稜線をもつ。口縁部内弯気味に開き、平坦な口唇部に至る。	外面ともヘラ磨き・丹彩。胴部内面ヨコナデ。にぶい黄橙色。	
壺	3	底径 (7.8)	平底。	外面とも工具によるナデ。にぶい黄橙色。	
壺	4	底径 7.7	底部に木葉痕残る。	粘土帯接合痕の上は密なヘラ磨き、下は粗いヘラ磨きが施される。内面工具によるナデ。にぶい黄褐色。	
壺	5		頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部外反気味に開き、丸い口唇部に至る。口縁部輪積痕を3段残す。	口縁部外面ヨコナデ後指頭による押圧。口縁部内面ヨコハケ。胴部外面ヨコハケ後一部ヨコヘラ磨き。胴部内面工具によるナデ。にぶい橙色。	
壺	6		頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部外反気味に開き、平坦な口唇部に至る。やや長胴。	口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面及び胴部外面ヨコハケ。胴部内面ヨコナデ。	
壺	7	口径(14.8)	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開き、平坦な口唇部に至る。輪積痕2段残す。球胴。	口縁部外面ヨコナデ後指頭による押圧。口縁部内面ヨコハケ。胴部外面ヨコハケナマハケ。胴部内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	
台付壺	8	底径 9.7	脚台部や内弯気味に開く。	外面タテハケ、内面ヨコハケ後工具によるナデ。にぶい褐色。	
高 环	9	口径 12.9 底径 15.8 器高 9.3	环部内弯気味に開き、丸い口唇部に至る。环底部に鋭い棱を有す。脚部はかなり外反し裾部はほぼ水平。3孔。	外面とも密なヘラ磨き・丹彩。脚部内面はハケ整形。褐色。	
異 形 土 器	10	口径 7.1 底径 10.6 器高 10.4	脚部ほぼ直線的に開く。	器部外面ナデ、内面工具によるナデ。頸部～脚部外面タテハケ、一部タテナデ。脚部内面工具によるナデ。にぶい黄橙色。	完存。
碗	11	口径 9.4 底径 3.7	体部ほぼ直線的に開き、口唇付近で内弯、丸い口唇部に至	外面タテハケ後ヨコヘラ磨き・丹彩。内面ヨコナデ後丹	完存。

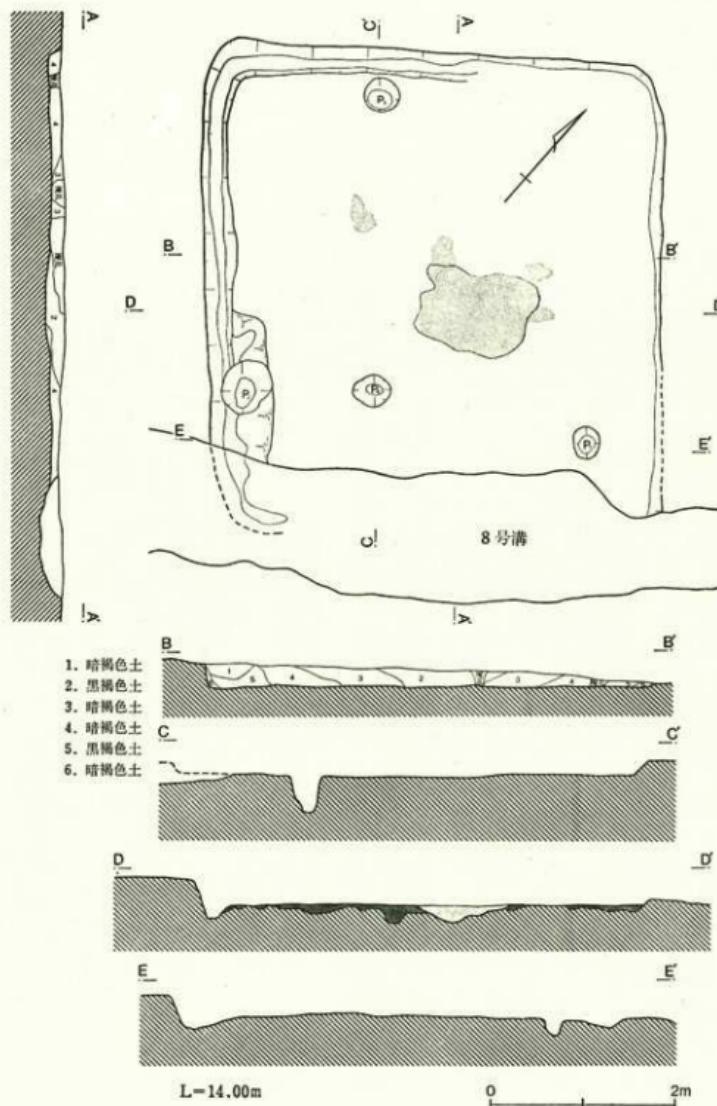


第147図 8号住居址出土遺物(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
培 (小型壺)	12	器高 6.4	る。平底。 頸部「く」の字状に屈曲し、 口縁部外反気穴に開き、平坦 な口唇部に至る。	彩。にぶい橙色。 口縁部外面ヨコナデ。口縁部 内面胴部外面ヘラ磨き・丹 彩。胴部内面工具によるナ デ。にぶい赤褐色。	

## 8号住居址出土土玉(第147図)

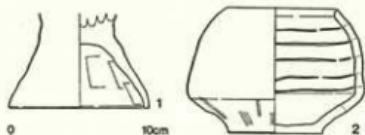
いずれも覆土からの出土である。1は球形を呈し、長さ3.2cm、最大胴径3.3cm、重量26.6g。浅黄色。2は球形を呈し、長さ3.4cm、最大開径3.4cm、重量31.8g。にぶい黄橙色。3は球形を呈し、長さ3.1cm、最大胴径3.4cm、重量29.6g。明黄褐色。4は球形を呈し、長さ3.2cm、最大胴径3.3cm、重量25.2g。にぶい黄橙色。5は球形を呈し、長さ2.9cm、最大胴径3.2cm、重量25.6g。にぶい褐色。6は球形を呈し、長さ3.1cm、最大胴径3.2cm、重量24.1g。明黄褐色。7は球形を呈し、長さ2.9cm、最大胴径3.0cm、重量20.7g。にぶい黄橙色。8は俵形を呈し、長さ3.1cm、最大胴径2.7cm、重量19.5g。にぶい黄橙色。9は球形を呈し、長さ2.8cm、最大胴径2.6cm、重量17.1g。褐灰色～灰黄褐色。10は円筒形を呈し、長さ3.4cm、最大胴径2.6cm、重量23.7g。にぶい黄橙色。11は半分欠損しているが、球形を呈し、長さ3.0cm。橙色。12も半分欠損しているため、法量は不明。浅黄色。13も半分欠損しているが、俵形を呈する。にぶい黄橙色。14も大部分が欠損しており、形態・法量は不明。浅黄色。



第148図 9号住居址

## 9号住居址（第148図）

8号住居址の東3.5mに位置する。南東壁は8号溝によって切られる。北東～南西方向の長さ5.0mで、炉址の位置からこの方向が主軸方向と考えられる。N-49°-Eである。ローム面から床面までの深さは南西壁際で25cm、北東壁際で5cmである。壁は傾斜して立ち上がる。壁溝は北西壁際～南西壁際にかけて残っており、幅25cm、深さ12cmである。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向角20°、距離40cmに位置する。径1.8m×0.9mと比較的大きい不整形を呈する。ピットは4個検出され、P<sub>1</sub>がその位置から考えて主柱穴と考えられる。深さは15cmである。P<sub>2</sub>は貯蔵穴と考えられ、径55cm×55cmのほぼ円形を呈する。中心の位置は住居址の対角線の交点から方向角155°、距離240cmである。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は性格不明である。遺物はいずれも覆土からの出土である。



第148図 9号住居址出土遺物

## 9号住居址出土土器（第149図）

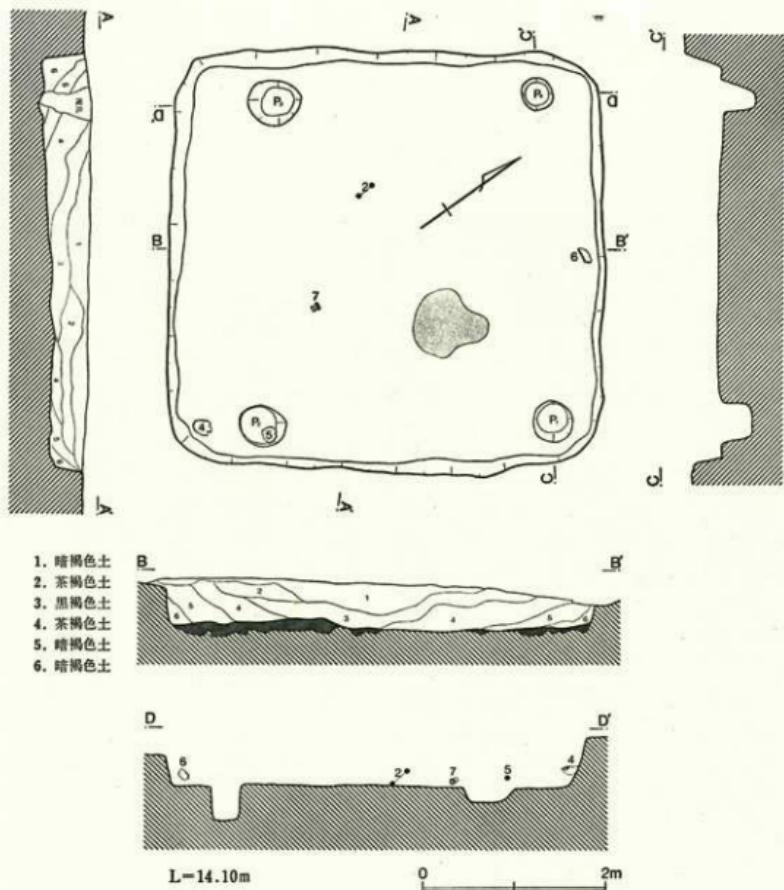
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	底径 10.1	脚台部内窩気味に開く。	外面整形不明。内面工具によるナデ。にぶい黄褐色。	
鉢	2	口径 7.8 胸径 12.7 底径 6.7 器高 9.0	胴部内窩気味に立ち上がる。 平底。	外面ナデ・ヘラ磨き。内面輪 積痕を明瞭に残す。赤褐色。	完存。

## 10号住居址（第150図）

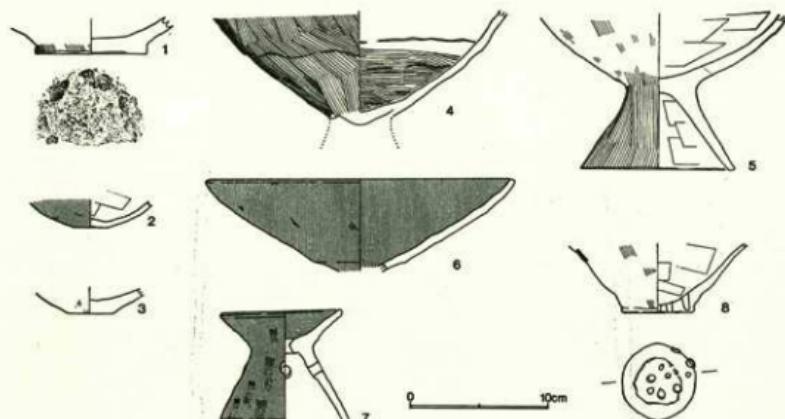
9号住居址の南東4mに位置し、11号住居址とは80cmしか離れていない。4.7m×4.5mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-36°-Eである。ローム面から床面までの深さは30~50cmで、壁はやや傾斜して立ち上がる。炉は地床炉で、その中心は主柱穴の対角線の交点から方向角62°、距離95cmに位置する。長径80cm、短径75cmの不整形を呈する。ピットは主柱穴が4個検出された。深さはP<sub>1</sub>35cm、P<sub>2</sub>15cm、P<sub>3</sub>35cmである。遺物はいずれも覆土からの出土である。

## 10号住居址出土土器（第151図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底径(7.9)	底部外縁にドーナツ状の粘土帶を貼付。	外面タテハケ後タテヘラ磨き。にぶい褐色。	
壺 (小型壺)	2			外面ヘラ磨き・丹彩。内面工具によるナデ。にぶい黄褐色。	
壺	3	底径 3.2		径1mm以下の微砂	

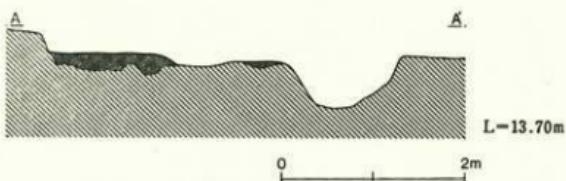


第150図 10号住居址



第151図 10号住居址出土遺物

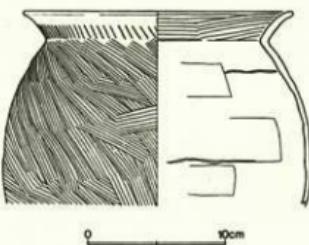
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	4			粒を大量に含み砂っぽいため整形不明。明赤褐色。	
台付甕	5	底径 11.1	脚台部直線的に開く。	外面粗いハケ整形。内面ヨコハケ後工具によるナヂ。にぶい橙色。	
高杯	6	口径(21.9)	杯部ほぼ直線的に開き、やや内湾して平坦な口唇部に至る。杯底部に緩い棱をもつ。	外面タテハケ後脚部のみナヂ。内面は脚部・脚台部とも工具によるナヂ。橙色。	
器台	7	口径 8.4 底径 8.8 器高 8.2	器受部直線的に開き、丸い口唇部に至る。接合部短い。脚部もほぼ直線的に開く。4孔。	外面ハケ整形後粗いヘラ磨き・丹彩。器受部内面ヘラ磨き・丹彩。にぶい橙色。	
瓶	8	底径 5.4	9孔。	外面タテハケ後ナヂ。内面工具によるナヂ。暗灰黄色。	



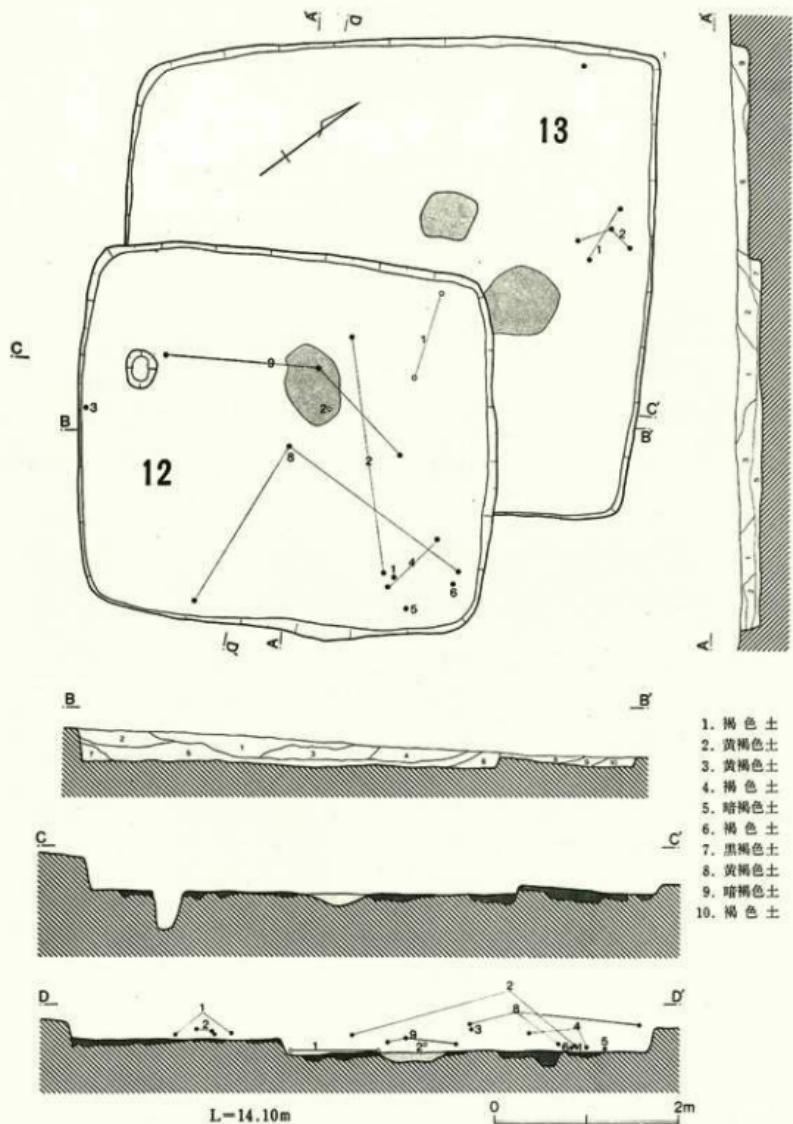
第152図 11号住居址

#### 11号住居址（第152図）

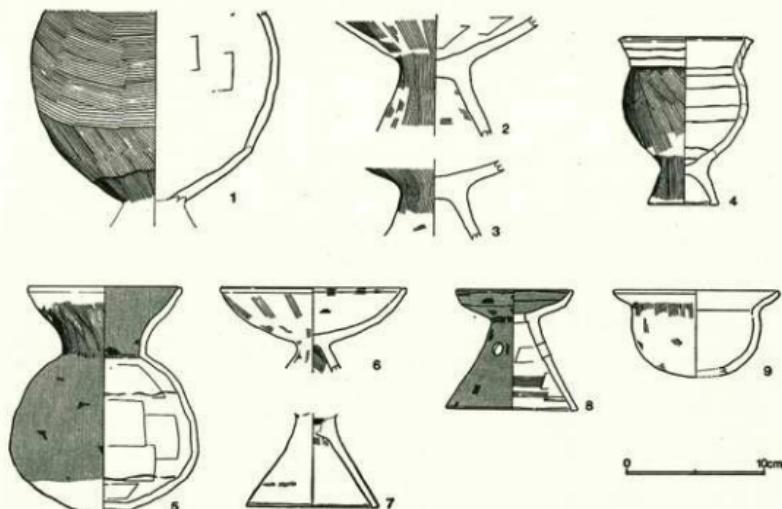
10号住居址の東 80 cm に隣接し、半分以上が2号溝によって切られる。北西～南東方向の長さは 4.0 m と推定される。貯藏穴の位置から、北西壁と直交する方向を主軸方向と考えると N-31°-E である。ローム面から床面までの深さは 20～25 cm で、壁はやや傾斜して立ち上がる。南コーナー際に貯藏穴と考えられるピットが穿たれている。65 cm × 90 cm の長方形を呈する。西コーナー付近に若干の焼土が検出された。遺物はいずれも覆土からの出土である。



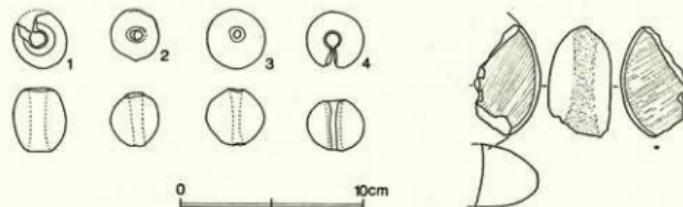
第153図 11号住居址出土遺物



第154図 12・13号住居址



第155図 12号住居址出土遺物(1)



第156図 12号住居址出土遺物(2)

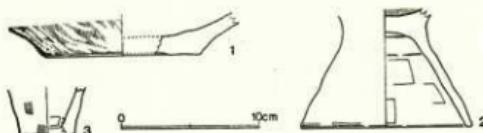
## 11号住居址出土土器(第153図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕		口径(19.1)	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部外反氣味に開き、丸い口唇部に至る。器肉薄い。	口縁部内面・胴部外面に極めて粗いハケ目が施される。口縁部外面ヨコナデ。胴部内面工具によるナデ。灰黄褐色。	

## 12号住居址(第154図)

10号住居址の南東4.5 m, 11号住居址の南4.5 mに位置し, 13号住居址を切っている。

4.0 m × 4.5 m の隅丸方形を呈し、主軸方向は N—53°—W である。ローム面から床面までの深さは 25 ~ 35 cm で壁はやや傾斜して立ち上がる。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向

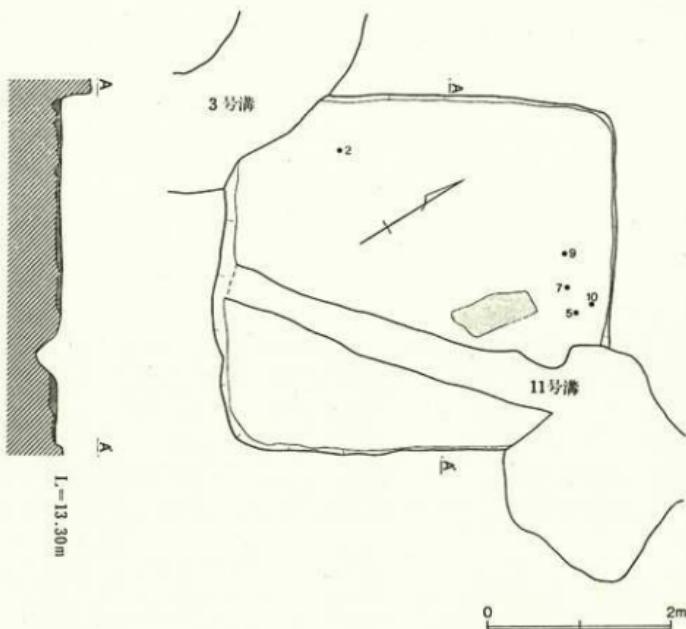


第157図 13号住居址出土遺物

角 25°、距離 65 cm に位置する。主軸方向に長い梢円形を呈する。ピットは北西壁際で 1 個検出された。径 40 cm × 35 cm の梢円形を呈し、深さ 40 cm である。遺物はすべて覆土からの出土である。

## 12号住居址出土土器（第155図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1			外面ヨコ～ナナメハケ整形。内面工具によるナデ後ヘラ磨き。にぶい橙色。	
台付甕	2			外面タテハケ後ナデ。内面工具によるナデ。にぶい褐色。	
台付甕	3			外面タテハケ整形。胴部内面ヘラ磨き。	
台付甕	4	口径(8.9) 胴径(9.1) 底径 4.9 器高 12.2	頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開き、平坦な口唇部に至る。口縁部 3 段の輪積痕を有す。ほぼ球胴で最大径やや上位に存す。脚台部は内窩気味に聞く。	胴～脚台部外面ハケ整形。口縁部ヨコナデ。胴部内面工具によるナデ。黒褐色。	
壺	5	口径(10.9) 胴径(12.8) 底径 3.1 器高 16.2	頸部 2 段に屈曲し、口縁部内窩気味に聞き、丸い口唇部に至る。胴部上膨れで最大径下位に存す。底部上げ底。	口縁部外面タテハケ後ヨコナデ。口縁部内面及び胴部上 3/4 ヘラ磨き・丹彩。胴部内面工具によるナデ。にぶい黄褐色。	
高杯	6	口径 13.3	杯部内窩気味に聞き、丸い口唇部に至る。	内外面ともハケ整形後ヘラ磨き。口唇付近ヨコナデ。にぶい黄褐色。	
高杯	7	底径 9.2	脚部ほぼ直線的に聞く。	外面タテハケ後タテヘラ磨き。内面ヨコナデ。にぶい黄褐色。	
器台	8	口径 7.9 底径 9.4 器高 8.8	器受部直線的に開いた後覗く内窓し、平坦な口唇部に至る。接合部短い。脚部外反気味に聞く。3 孔。	内外面ともヘラ磨き・丹彩。脚部内面はヨコハケ後工具によるナデ。にぶい橙色。	
碗	9	口径(11.7) 器高 6.3	丸い湯部から「く」の字状に屈曲して口縁部や内窩気味に聞き、平坦な口唇部に至る。	口縁部ヨコナデ。器部内面ヘラ磨き。外面ハケ整形後ヘラ磨き。にぶい赤褐色。	



第158图 14号住居址

### 12号住居址出土土玉（第156図）

いずれも覆土からの出土である。1は俵形を呈し、一部欠損している。長さ 3.3 cm、最大胴径 2.9 cm、重量 21.8 g。にぶい黄橙色。2は球形を呈し、長さ 2.6 cm、最大胴径 2.6 cm、重量 14.9 g。にぶい黄橙色。3は球形を呈し、長さ 2.8 cm、最大胴径 3.2 cm、重量 25.7 g。橙色。4は球形を呈し、一部欠損している。長さ 2.7 cm、最大胴径 3.2 cm、重量 21.9 g。胴黄褐色。

13号住居址（第154図）

10号住居址の南東 2.3m, 11号住居址の南 1.7mに位置し、南北分を12号住居址によって切られる。5.7m×5.1mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-35°-Eである。ローム面から床面までの深さは10~20cmで、壁はやや傾斜して立ち上がる。炉は地床炉が2個検出された。東側の炉の中心は住居址の対角線の交点から方向角 4°、距離 150cm に位置し、主軸方向に長い不整椭円形を呈する。西側の炉の中心は方向角 311°、距離 110cm に位置し、不整形を呈する。遺物はいずれも覆土からの出土である。

## 13号住居址出土土器（第157図）

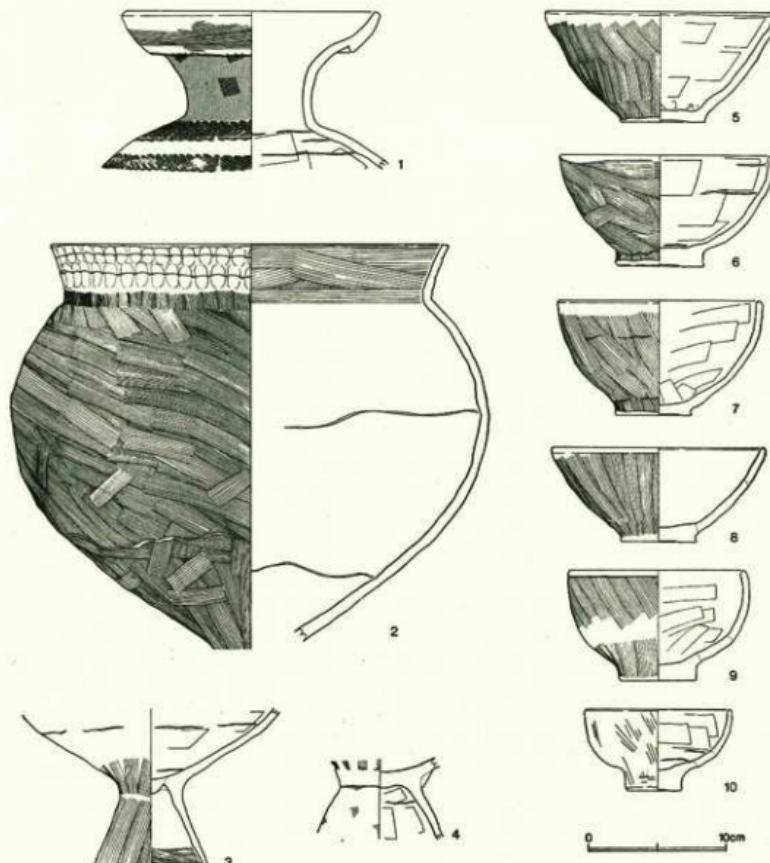
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1		平底。	外面ハケ整形後ヘラ磨き。内面ナデ。にぶい黄橙色。	
高壺 (?)	2	底径(12.3)	脚部ほぼ直線的に開く。	壺部内面ヘラ磨き・丹彩。脚部外面粗いヘラ磨き、内面工具によるナデ。橙色。	
碗 (?)	3	底径(3.7)		外面ハケ整形後ナデ。内面ナデ。暗灰黄色。	

## 14号住居址（第158図）

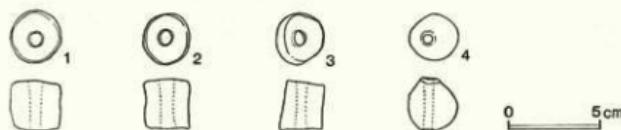
12・13号住居址の東約15mに位置し、2~13号住居址のグループとは離れている。本住居址の北東側及び南東側は数mで沖積台地が終わるため、本住居址は集落の東端の住居址と言えよう。西コーナー及び東コーナーから南西壁中央にかけて近世の溝によって切られている。4.3m×3.8mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-33°-Eである。ローム面から床面までの深さは、南東壁際で浅く7cm、北西壁際が33cmである。炉は地床炉で、その中心は住居址の対角線の交点から方向角25°、距離85cmに位置する。主軸方向に長い不整形を呈する。遺物はいずれも覆土からの出土である。

## 14号住居址出土土器（第159図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 18.3	頭部ゆるく屈曲した後、ほぼ垂直に立ち上がり、外反して複合口縁部に至る。口縁部は内湾気味に平坦な口唇部に至る。	肩部に3段の縄文帯。上2段はLRとRLの単節縄文で羽状縄文を呈す。最下段はRL単節縄文で3段それぞれの下端にS字状結節文が付く。頭部ヘラ磨き・丹彩。複合口縁部ヨコハケ後ヨコナデ。頭～口縁部内面ヘラ磨き。胴部内面工具によるナデ。内面は全面まっ黒。他は橙色。	
台付甕	2	口径 27.1 胴径 34.9	頭部「く」の字状に屈曲し、口縁部直線的に開き、平坦な口唇部に至る。口縁部3段の輪積度。胴部偏平で最大径上位に存す。	口縁部外面ヨコナデ後指頭による押圧。口縁部内面ヨコハケ整形。胴部外面ナナメ～タテハケ（粗・密2種類）。内面工具によるナデ。にぶい橙色。	
台付甕	3	底径 8.3	脚台部直線的に開く。	外面ハケ整形（胴部密、脚台部粗）。内面工具によるナデ。にぶい褐色。	
台付甕	4		接合部に幅1cm前後の粘土	胴部内面ヘラ磨き。暗褐色。	



第159図 14号住居址出土遺物(1)



第160図 14号住居址出土遺物(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
塊	5	口径 16.5 底径 6.0 器高 8.1	帯が巡る。 緩く内湾気味に立ち上がり丸い口唇部に至る。やや上げ底。	外面タテヘナナメハケ整形。 内面ナデ。明赤褐色。	
塊	6	口径(15.5) 底径 6.3 器高 8.5	内湾して平坦な口唇部に至る。平底。	外面ハケ整形。内面ナデ。灰黄色。	
塊	7	口径(14.6) 底径 5.4 器高 8.5	内湾して丸い口唇部に至る。やや上げ底。	外面ハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。にぶい橙色。	
塊	8	口径(15.3) 底径 5.3 器高 7.1	内湾気味に開いて丸い口唇部に至る。やや上げ底。	外面ハケ整形後ナデ。内面ナデ。赤褐色。	
塊	9	口径 12.6 底径 4.9 器高 8.5	かなり内湾して丸い口唇部に至る平底。	外面ハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。にぶい赤褐色。	
塊	10	口径 10.4 底径 4.9 器高 6.2	内湾して丸い口唇部に至るやや上げ底。	外面ハケ整形後ナデ。内面工具によるナデ。にぶい橙色。	

## 14号住居址出土土玉（第160図）

いずれも覆土からの出土である。1は円形筒形を呈し、長さ 2.6 cm、最大胴径 2.7 cm、重量 23.6 g。にぶい褐色。2は円筒形を呈し、長さ 2.5 cm、最大胴径 2.7 cm、重量 19.9 g。にぶい褐色。3は歪んだ円筒形を呈し、長さ 2.6 cm、最大胴径 2.6 cm、重量 18.3 g。にぶい黄橙色。4は俵形を呈し、長さ 2.8 cm、最大胴径 2.6 cm、重量 14.8 g。にぶい褐色。

(藤原 高志)

## (3) 近世の遺構と出土遺物

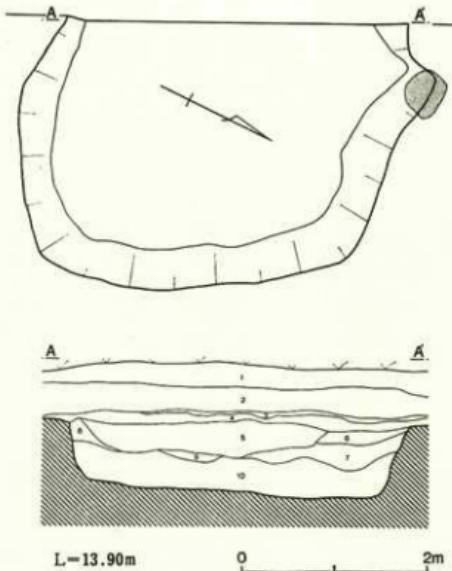
堅穴遺構 5 基、溝 12 本が検出された。

## 1号堅穴遺構(第 161 図)

発掘区北端に位置し、一部発掘区域外にかかって検出された。北壁で 2 号炉穴を切っている。長径 4.5 m の不整梢円形を呈すると考えられる。壁は比較的急に傾斜し、底はほぼ平らである。深さは約 80 cm 前後である。1号堅穴遺構からは、焼けた壁片と多数の石片などの遺物が、いずれも覆土から検出された。壁片は後述する 1 号溝から検出されているものと同じであるので、1号溝と同時に埋められたと考えられる。覆土の層序は以下の通りである。

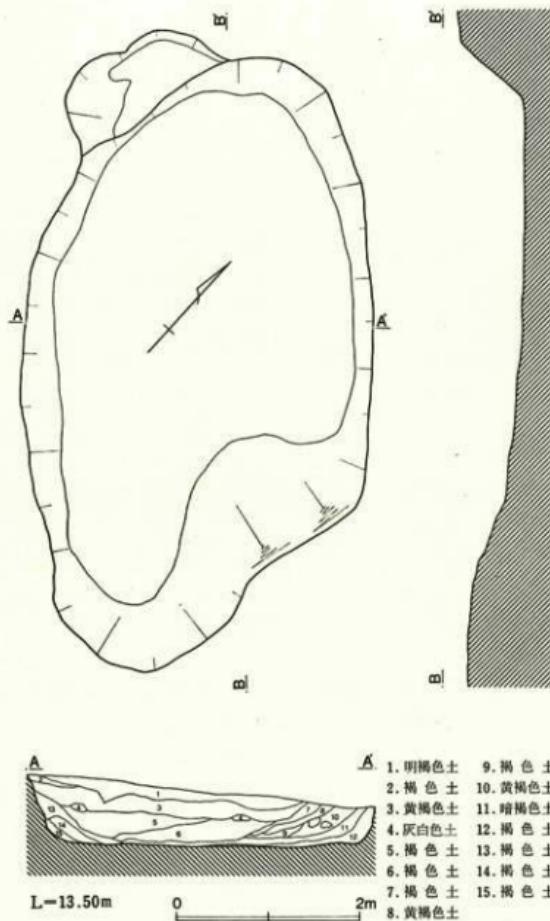
- |        |      |          |        |
|--------|------|----------|--------|
| 1 黄褐色土 | (表土) | L=13.90m | 0 1 2m |
| 2 暗褐色土 |      |          |        |
| 3 褐色土  |      |          |        |
| 4 黒褐色土 |      |          |        |
- 5 褐色土 径 0.5~1 cm のローム粒を含み、ベースはきめの細かい土。
  - 6 明褐色土 ローム粒・ロームブロックによって構成される。
  - 7 黄褐色土 ローム粒・ロームブロックによって構成される。ロームブロックは 6 層より大きい。
  - 8 黄褐色土 ベースの土はきめの細かいローム微粒子。
  - 9 暗褐色土 径 2~3 cm のロームブロックを含み、ベースはきめの細かい土。
  - 10 黄褐色土 ローム粒・ロームブロックによって構成されるしまりのある土。

第 161 図 1号堅穴遺構

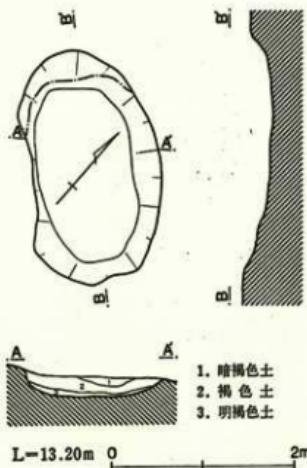


2号堅穴遺構(第 162 図) 1号堅穴遺構の南東約 7 m に位置する。6.8 m × 3.9 m の不整形を呈する。壁はやや急に傾斜するが、東側のみ非常に緩やかである。ローム面からの深さは西側で約 75 cm、東側で約 40 cm である。遺物は、近世の陶器片が 9 層を中心に出土した他、多量の石片がやはり覆土から検出された。覆土の層序は以下の通りである。

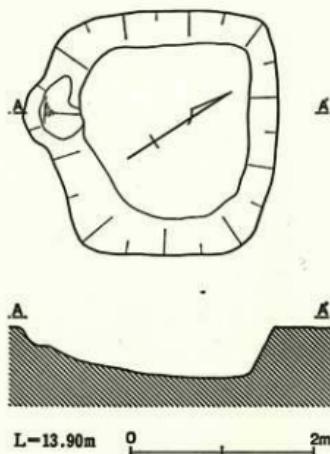
- 1 明褐色土 ベースの土はきめが細かく、径 1~2 cm のロームブロック、灰白色粘土を含



第 162 図 2 号竖穴造構



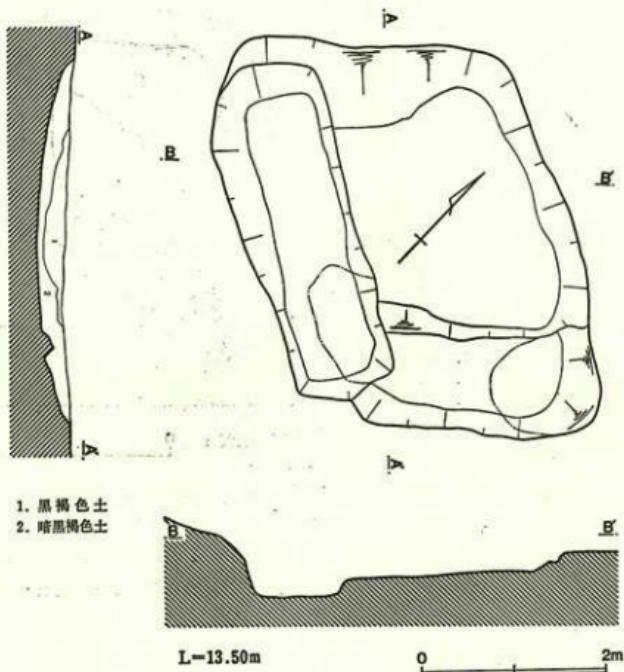
第163図 3号竪穴遺構



第164図 4号竪穴遺構

む。

- 2 褐色土 ベースの土はややきめ粗く、しまりない。径 1cm 程のロームブロックを含む。
  - 3 黄褐色土 白灰色粘土・ロームブロックを多量に含む 粘性のある土。焼土・炭化物を含む。
  - 4 灰白色土 粘土塊である。
  - 5 褐色土 ロームブロックは3層より多いが、粘土は極めてわずかになる。焼土を含む。
  - 6 褐色土 ロームブロック・ローム粒が主体のしまりの悪い土。
  - 7 褐色土 ベースの土はきめが細かいが、しまりはあまり良くない。
  - 8 黄褐色土 ベースの土は7層と同じだが、ロームブロック・ローム粒を多く含む。
  - 9 褐色土 ベースの土はきめが細かく、炭化物を多く含む。
  - 10 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒によって構成される。しまりなし。
  - 11 暗褐色土 ベースの土はきめが粗く、ロームブロック・ローム粒・炭化物を多く含む。
  - 12 褐色土 ベースの土はきめが粗く、ロームブロックをわずかに含む。
  - 13 褐色土 ベースの土はきめが細かく、ローム粒を含む。
  - 14 褐色土 ベースの土はきめが粗く、ローム粒を含む。
  - 15 褐色土 12層に類似する。
- 3号竪穴遺構（第163図） 2号竪穴遺構の南東11mに位置する。2.6m×1.4mの椭円形を呈する。壁はなだらかに傾斜してそのまま底部に移行する。ローム面からの深さは20cm前後である。ほぼ全面赤く酸化して、固くしまっている（図の一点鎖線の内側）。遺物は確認されなかった。覆土の層序は次の通りである。



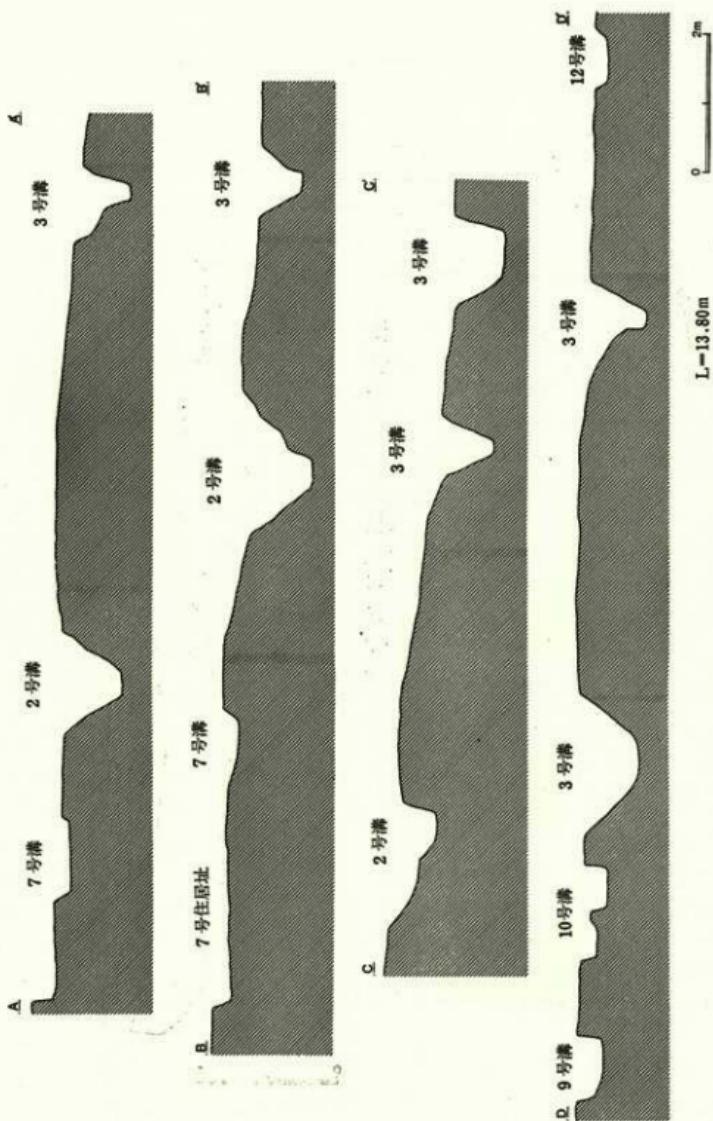
第165図 5号堅穴造構

- 1 暗褐色土 ベースはしまりのある土で、ローム粒・白色粘土粒・炭化物をわずかに含む。
- 2 褐色土 ベースはしまりのある土で、ローム粒・白色粘土粒・炭化物を含む。
- 3 明褐色土 ベースはしまりのある土で、酸化したロームの粒子・ブロックを含む。

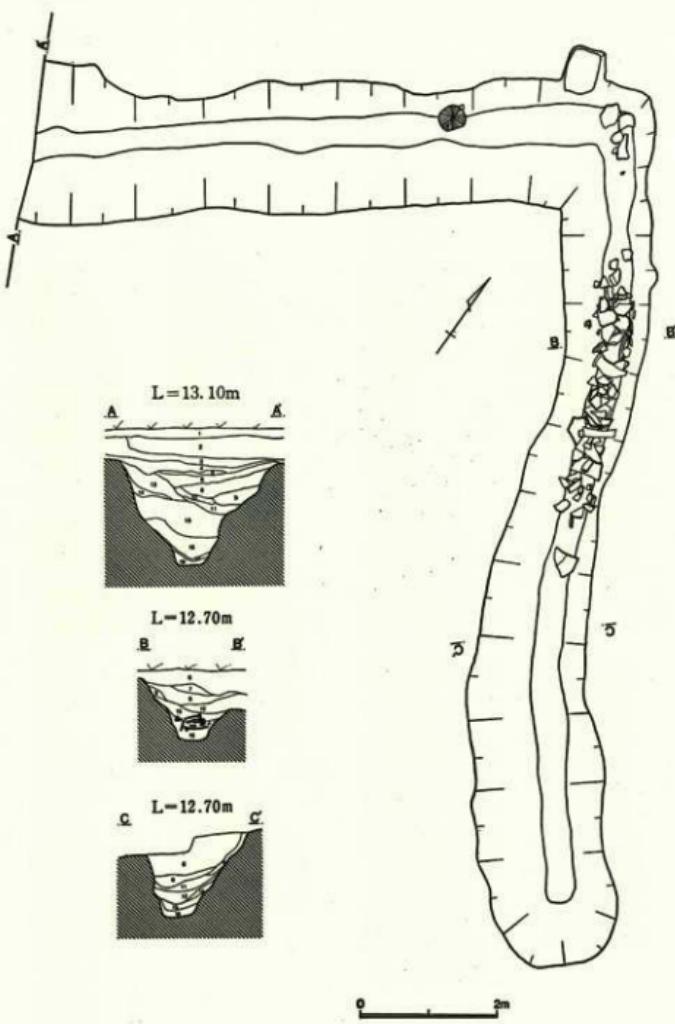
4号堅穴造構(第164図) 2号堅穴造構の南 11m に位置し、 $2.8\text{m} \times 2.7\text{m}$  のほぼ隅九方形を呈する。壁はやや急に傾斜するが、南壁中央部は緩やかな傾斜をみせる。ローム面からの深さは約 55 cm である。時期・性格を決定するような遺物は出土しなかった。

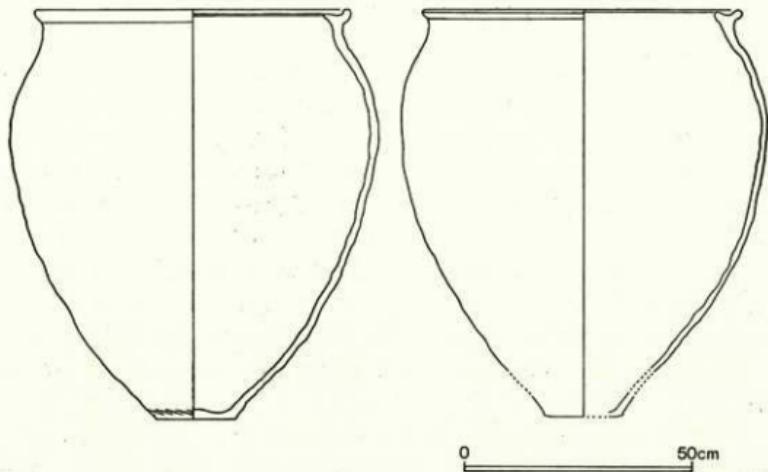
5号堅穴造構(第165図) 4号堅穴造構の南東 7m に位置し、 $4.1\text{m} \times 3.4\text{m}$  の隅丸平行四辺形を呈する。壁は緩やかに傾斜してそのまま底部に移行する。南東・南西部は 1.0~1.3 m の幅で溝状にさらに深く掘られている。ローム面からの深さは中央部で約 70 cm、南西部で約 90 cm である。全面赤く酸化して固くしまっている。図の一点鎖線の内側は特に酸化が激しい。覆土の層序は以下の通りである。

- 1 黒褐色土 焼土粒・炭化物を若干含む。
- 2 暗黒褐色土 焼土粒を若干、炭化物を比較的多量に含む。粘土ブロックも含む。

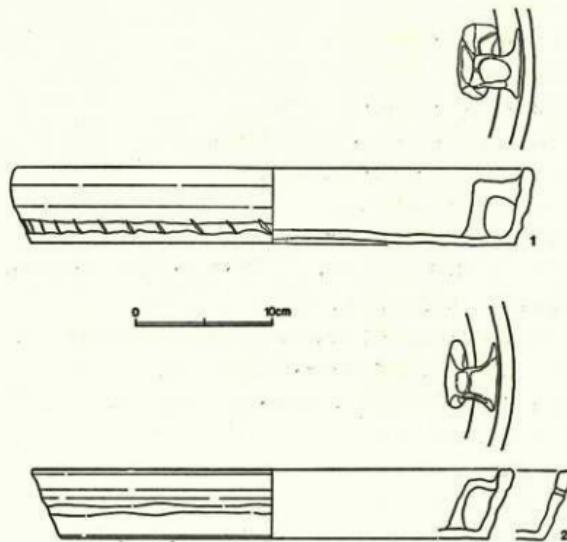


第166図 溝エレベーション図





第168図 1号溝出土藍甕



第169図 3号溝出土(1)・表採(2)内耳土器

覆土から、染付・燈明皿・擂鉢・砥石・瓦片などが検出された。幕末～明治初頭のものと考えられる。

溝（第 166 図） 12本検出された。1号溝を除く11本は発掘区南半に集中し、お互いの切り合いも激しいため、実際の数は11本以上である可能性がある。11本のうち発掘区中央を北西～南東に縱走する2号溝は、その両端で南北方向にはほぼ直角に屈曲する。両屈曲点間の距離は約70 cmを測る。断面形は薬研状を呈し、深さも1 m 前後と他の溝に比べて深い。この溝は、発掘区域南西方向に存在したと推定される屋敷の敷地を画す溝と考えられる。2号溝からは第 169 図に示されるような形態をもつ内耳土器や幕末～明治初頭と考えられる陶磁器片がわずかに検出された。

3号溝も一部で薬研状を呈し、南部の覆土から内耳土器片が多数、陶磁器片と共に検出された。内耳土器で復元できたものが第 169 図 1 に示したものである。内耳の数は1個・2個1対の計3個で、口径 37.2 cm、底径 35.6 cm、器高 5.6 cm である。全体的に黒褐色を帯びる。

発掘区南半の他の溝は2・3号溝に比べて浅く、長さも短かい。遺物はほとんど確認されなかつた。

1号溝（第 167 図）は発掘区北端に存在する。1・2号竪穴遺構に挟まれて北東に延び、ほぼ直角に屈曲して南東に約 12 m 延びて終結する。幅は 1.5 m 前後で、ローム面からの深さは 0.9～1.5 m である。断面形は逆梯形状を呈し、底はほぼ平らである。覆土の層序は以下の通りである。

- 1 表土
- 2 黒褐色土
- 3 暗黒褐色土
- 4 暗褐色土 ローム粒・炭化粒を含む。
- 5 暗黒褐色土 小砂利・炭化物を若干含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒を含む。
- 7 明褐色土 しまりはあまりなく、炭化物を微量含む。
- 8 暗黒褐色土 ローム粒・焼土・炭化物を若干含む。
- 9 黄褐色土 ロームブロックを含む
- 10 黑褐色土 ローム粒・焼土・炭化物を多く含む。
- 11 黑褐色土 ベースは 10 層に似るが、ローム粒・焼土・炭化物の粒が大きい。
- 12 暗黄褐色土 ローム粒を多く含む。
- 13 黑褐色土 炭化物・焼土が多く含まれる。土よりもむしろ炭化物の方が多く感じられる。
- 14 暗褐色土 砂質に富み、若干の炭化物・焼土を混入する。
- 15 黑褐色土 土の量は極端に少なく、炭化物・焼土で構成される。
- 16 赤褐色土 烧土で構成される。
- 17 黒色土 炭化物で構成される。
- 18 暗褐色土 しまりが悪くてさらさらしている。

1号溝からは藍甕 2 個、石臼 3 個（うち茶臼 1 個）、陶磁器片、鐵釘、炭化米などが、大量の瓦片・壁片・炭化材と共に検出された。いずれも 15～18 層からの出土である。瓦片・壁片は屈曲点

から東側の溝で多く検出され、そのほとんどが酸化して赤味を帯びている。巴文軒丸瓦片も 1 点含まれている。石臼は 1 個が南側の溝から、他の 2 個は東側から検出された。陶磁器片は東側の溝からわずかに出土したにすぎないが、幕末～明治初頭のものと考えられる。釘・炭化米も東側の溝からである。藍斐は東側の溝から破片で検出され、復元したところ 2 個体になった（第 168 図）。1 は口径 68 cm、胴部最大径 80 cm、底径 18 cm、器高 89 cm である。2 は口径 68 cm、胴部最大径 80 cm、底径 17 cm、器高 89 cm であり、1 と非常に近い値をとる。いずれも内面に染料の付着と考えられる黒ずんだ部分が見られる。

（藤原 高志）

## 4 結 語

### (1) 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構について

馬込新屋敷遺跡の該期の遺構は、14軒の竪穴住居址である。すべて隅丸方形を呈する。大きさは3号住居址の $6.8m \times 6.2m$ が最大、6号住居址の $3.6m \times 3.9m$ が最小である。3号住居址以外にも8号住居址( $6.1m \times 5.6m$ )、13号住居址( $5.7m \times 5.1m$ )などが比較的大きい住居址である。

竪穴住居址の構成要素の有無を下表に示した。14軒の住居址のうち、この構成要素をすべて備えているものはなかった。炉はほとんどの住居址で確認されたが、壁溝・主柱穴・貯蔵穴を所有するものは、いずれも全体の半数にも満たなかつた。これらの要素のうち炉と貯蔵穴の位置がさら遺跡と異なっている。さら遺跡の場合、炉は北西壁寄り、貯蔵穴は南東壁際の北東寄りに位置する住居址が大半であった。これに対して本遺跡では、炉が北東壁寄りに位置する住居址が半数近くあり(2・3・9・10・13・14号住居址)、また2・7・9・11号住居址は貯蔵穴が南西壁際の南東寄り、あるいは南コーナーに位置する。しかも、南コーナーに位置する2・11号住居址の貯蔵穴はほぼ方形を呈し、その規模も他に比べて大きい。

主軸方向も、前述の住居址はいずれも北から東寄りに振れることになる。これらを数値で分類すると、N-31°～36°-E(10・11・13・14号住居址)、N-41°～44°-E(2・3号住居址)、それ以上のもの(7・9号住居址)となる。また主軸方向が北から西寄りに振れる住居址はN-25°-W(1号住居址)、N-38°～40°-W(6・8号住居址)、N-53°-W(12号住居址)の3つに類別できる。それぞれのグループの中の2～4軒は近接しており、中でも10・11・13号住居址の3軒は、お互いに僅か1～2mしか離れていない。これら3軒は同時存在の可能性は薄く、近接地への移設ということで考えられるかもしれない。2号住居址と3号住居址、6号住居址と8号住居址の関係も同様であろう。しかもこの3グループにはそれぞれ3・8・13号住居址といった大型住居址が1軒ずつ含まれる点も興味深い。

住居址	大きさ(m)	主軸方向	壁 溝	炉	主柱穴	貯蔵穴
1	4.1 × 5.5	N-25°-W	○	○	×	×
2	3.8 ×	N-41°-E	×	○	×	○
3	6.8 × (6.2)	N-44°-E	×	○	○	△
4	4.7 ×	N-43°-E	×	×	×	×
5	5.4 ×	N-39°-W	×			
6	3.6 × 3.9	N-40°-W	×	○	○	△
7	5.2 ×	N-58°-E	×	○	×	○
8	6.1 × 5.6	N-38°-W	○	○	○	
9	5.0 ×	N-49°-E	○	○	×	○
10	4.7 × 4.5	N-36°-E	×	○	○	×
11	(4.0) ×	N-31°-E	×			○
12	4.0 × 4.5	N-53°-W	×	○	×	×
13	5.7 × 5.1	N-35°-E	×	○	×	
14	4.3 × 3.8	N-33°-E	×	○	×	×

なお、発掘区の北東～南東側は台地の終わる急斜面になっているので、1・4・14号住居址を結ぶラインが本集落の北～東限であったことがわかる。また、本遺跡の西側で該期の堅穴住居址2軒が検出されている(註1)。これも含めると、本集落は発掘区より西に數10m広がっていたことがわかる。

## (2) 弥生時代末～古墳時代初頭の土器について

馬込新屋敷遺跡では、住居址を中心に多数の土器が出土している。器種は、壺・甕・高杯・器台・塼・瓶などである。以下に、さら遺跡で利用した分類基準に従ってこれらを類別し、特殊なもののみ、他遺跡に類例を求めるにした。

### 壺形土器

**A類** 二重口縁のもので、3住-2・3、8住-1、14住-1が該当する。このうち3住-2は頸部に凸帯が巡り、類例としては小室天神前遺跡3号住に見られる。

**B類** 直口縁のもので、2住-1(B<sub>1</sub>)、3住-1(B<sub>2</sub>)が該当する。後者は肩部、口縁部内面に繩文帯が巡り、直口縁のものとしては珍しい。しかも南関東系の網目状撚糸文がわずかに見られる。

**C類** 広口壺は2住-3の1例のみである。

**D類** 小型壺で、1住-8、2住-7、3住-11・12、8住-2、12住-5が該当する。1住-8は類例が諏訪山遺跡39号住に見られる。また8住-2はさら遺跡1住-7と同タイプである。12住-5は尾山台遺跡A4-1号住に類例がある。なお3住-11は、肩部及び口縁部外面に連続鉤歯文などの幾何学文をもち、久ヶ原式の特徴を備えている。類例は大宮公園内遺跡、砂ヶ谷戸Ⅱ遺跡1号住、平林寺遺跡11号住、前耕地遺跡に見ることができる。

以上の4大別のいずれにも該当しないものとして、2住-4がある。吉ヶ谷式の壺であり、本遺跡では唯一の例である。

### 甕形土器

**A類** 口縁部に輪横痕を残すもので、8住-5・7、12住-4、14住-2が該当する。頸部は8住-5、14住-2が2段に、8住-7、12住-4が「く」の字状に屈曲する。

**B類** 口唇部に刻み目を施すものは、3住-13の1例のみで、頸部は緩く彎曲する。

**C類** 素口縁のもので、6住-1、7住-1、8住-6、11住が該当する。頸部はいずれも「く」の字状に屈曲する。6住-1は胴部下半にナナメヘラ磨きが施されている。また11住の甕のハケ目は他に比べて粗いもので、特に口縁部外面のナナメハケは極めて粗い。

### 高杯形土器

**A類** 坎底部に稜をもたず、そのまま脚台部になだらかに移行するもの。12住-6がA<sub>1</sub>類に該当する。

**B類** 坎底部に稜をもつもの。2住-8、3住-7、6住-3、10住-6が、脚台部の形態は不明であるが、当類に該当する。このうち2住-8は坎部外面に細かいヨコハケが残っており、大宮公園内遺跡出土のものと類似している。8住-9は脚台部が大きく外反し、B<sub>2</sub>類に該当する。

#### 器台形土器

A類 器受部が直線的に開くもので、3住-20, 10住-7が該当する。

B類 器受部が彎曲して開くもので、1住-6, 3住-9, 7住-3が該当する。このうち後2者は、接合部が長く、特徴的である。こうした例は稻荷台遺跡2号住、西台遺跡1号住などに見られるが、西台遺跡の器台はC類に属する。

C類 器受部が屈曲して外面に稜を持つもので、12住-8が該当する。

#### 壇形土器

A類 底部から口縁部まで内彎して立ち上がる。14号住で検出された6個はすべて当類に該当する。いずれも外面にハケ目を残す。また、8住-11, 13住-3は底部からほぼ直線的に立ち上がるもので、諏訪山遺跡8号住に類似が見られる。

B類 口縁部が外反するもので、12住-9が該当する。さらには遺跡の2例と異なり、屈曲が鋭く、口縁部も大きく開く。

#### 籠形土器

10住-8の1例のみである。底部穿孔は9孔である。

#### 異形土器

8住-10である。この形態の土器は、千葉・茨城県で10数例確認されており、「器台状脚形土器」などと称されている(註2)。

(藤原 高志)

註1 蓼田市教育委員会『馬込七番第1・第2遺跡』1982

註2 藤岡孝司「粗製な器台状脚形土器について」『研究連絡誌 第2号』1983 財団法人千葉県文化財センター

VI

馬込大原遺跡

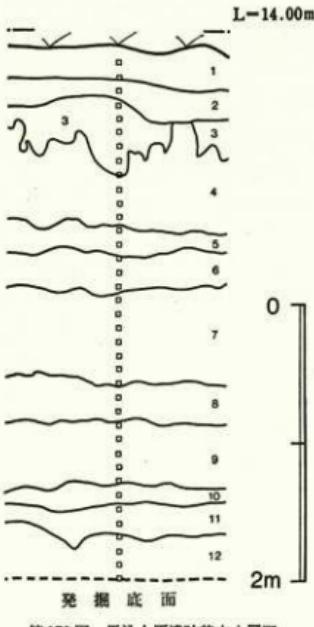
## 1 遺跡の概観

馬込大原（旧蓮田7号）遺跡は、今次調査および蓮田市教育委員会による調査により遺跡の範囲は台地上全面約18,000m<sup>2</sup>として把握される。地形は元荒川と綾瀬川にはさまれた南北に長い様相を呈している。北東側は元荒川によって開拓された広い低湿地となっており、黒浜の台地と向かい合っている。低地は水田として利用されている。南西方面は綾瀬川によって開拓された低湿地となつておらず、水田として利用され、ところどころに沼沢地となっている。台地と水田面との比高差は5~6メートルを数えている。

調査区内の標準土層は第170図に示したとおりである。調査前は雑木林であったため木根による土層の擾乱が見られるが上層より次の層序を示していた。1層一黒褐色土層、表土層でいわゆる腐食土層であった。2層一暗褐色土層、縄文時代の遺物包含層であると同時に弥生～古墳時代の遺構の確認面であった。縄文土器の層位的差は見い出しがたく単層としてとらえられる。3層一明褐色土層、ソフトローム層であり、ハードロームはブロック状に見られるがソフトローム化しており、ハードロームと一線を引くことは大変むずかしい。4層との境はクラック状の状態を示しており、極めて複雑な様相を呈している。4層一黒褐色土層である。ブラックバンド層であり、大宮台地北部にあっては1層しか見られない。しかしながら上層においては白色のスコリア状粒子が見られ下層では順次少なくなる。5層一黄褐色土層、6層一褐色土層、7層一褐色土層、8層一赤褐色土層、9層一赤褐色土層。5~9層はローム層であるが水を帯びたような様相である。8層、9層あたりでは小さな疊もみられるようになる。10層一赤褐色砂層、11層一赤褐色砂層。10層、11層は色調的にはほとんど識別ができないが、粒子が11層の方が大きくなり固くなる。12層一灰褐色砂層、極めて固く、ほとんど石とかわらないくらいである。スコップ等ではほとんど掘れなくなり、つるはしで少しづつ掘り下げたほどである。前述のささら遺跡の古墳の石室に使用された材質が12層に極めて類似している。以上12層に分層できた。

調査にさいしては10m×10mの大グリットを設定し、さらに中を2m×2mの小グリットで分割した。グリッドの名称は南北に数字、東西にアルファベットの記号を付し、発掘調査を行なった。A~Cについて発掘区域外になつてある。

調査成果は縄文時代～近世にわたる。遺構としては縄文時代前期黒浜式期、中期加曾利E式期、後期初頭称名寺式期の住居址各1軒、早期貝殻条痕文(茅山式)



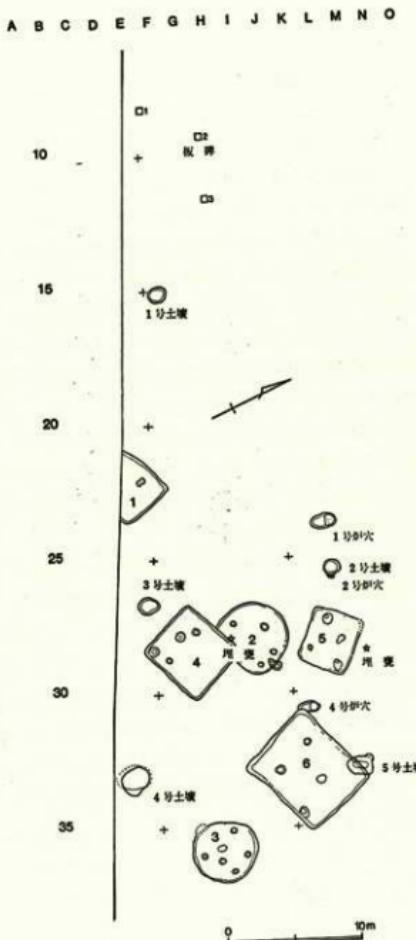
第170図 馬込大原遺跡基本土層図

期の炉穴 4 基、後期称名寺式期の土坑 1 基を検出した。また、弥生時代末～古墳時代初頭の住居址 3 軒、近世の土坑 4 基が検出された。

遺物は縄文早期～晩期にわたる多くの時期の遺物が検出されているがやはり住居址の存在する 3 時期の土器が他を圧倒している。しかし前期後葉の土器の出土はかなり多く見られ、発掘区域外に該期の遺構の存在する可能性は大である。

当台地の他地点において蓮田市教委による発掘調査がおこなわれているが、計 8 軒の弥生時代末～古墳時代初頭の住居址が検出されている。集落の構成も少しずつ明らかになりつつある。それによれば台地の中央部にも遺構は検出されており、弥生時代末～古墳時代初頭の時期の住居址はかなりの数が予期されるであろう。しかしながら縄文時代に関しては、他地点では中期～後期初頭の土器片が若干検出されているにすぎない。縄文時代の集落の広がりは未だ明らかではない。今後の課題であろう。

(大塚 孝司)



第 171 図 馬込大原遺跡全図 (1: 400)

## 2 発掘調査の経過

馬込大原遺跡の発掘調査は昭和 54 年 11 月末日より昭和 55 年 2 月末日までの約 3 ヶ月間を費やして行なった。又 1 月末日からは当遺跡と同時に蓮田 6 号馬込新屋敷遺跡の発掘調査も行なつたため一部実測は 3 月に実施したところもある。

発掘調査に際しては 2 m × 2 m のグリッドを発掘区全面におおい行なった。20 列の北端で旧農道により台地が削平されていたのでこの地点より南へ向かって表土剥ぎを始める。

11 月末～12月初頭 表土剥ぎに順じて住居址の落ち込みを 3 軒確認する。1 号住居址～3 号住居址と仮称する。弥生時代末～古墳時代初頭のものである。又 22～23-E グリッド周辺、28-I, 37-H 付近で縄文土器が多数出土するものの遺構の検出はできなかつた。

12 月中旬 確認済みの住居址を順次調査にかかる。又併行して 19～0 列に向かい表土剥ぎを行なう。各住居址の断面図及び遺物出土状態の写真撮影を行う。

12 月下旬 表土剥ぎはほぼ終了する。19～0 列においては土坑状の落ち込みは検出されるが、木根等による擾乱がはげしく、縄文時代の土坑は 1 基確認することができたのみである。又 1 号～3 号住居址を完掘し、写真撮影及び平面実測を行う。板碑を 3 枚検出する。土坑に伴うものか確認するも土坑を検出することはできなかつた。

1 月初旬 縄文時代の住居址 2 軒を確認する。4, 5 号住居址と仮称する。4 号住居址の発掘を開始する。併行して 6 号遺跡（新屋敷遺跡）に重機を搬入させるため、搬入路内の調査を行う。

1 月中旬 4 号住、5 号住の調査を続行し、断面図、写真撮影を行う。36-I 付近にて中期加曾利 E 式の住居址を検出する。

1 月下旬 6 号（新屋敷遺跡）の表土剥ぎを重機で行う。大原遺跡 6 号住居址を掘り始める。

2 月上旬 炉穴を検出する。1～4 号と仮称する。

2 月中旬 5 号住の平面図を作成する。2 号住居址の断面図を作成する。

2 月下旬 1 号埋甕、5 号住埋甕、1～4 号炉穴の平面図、及び断面図の作成、並びに先土器時代遺物検出のため深掘りを開始するが何ら遺物は発見されなかつた。

3 月初旬 深掘りの断面図および土壤サンプルを行い全ての調査を終了した。

発掘調査時の住居址の名称と報告書の名称は次のように対比される。

1 号住一旧 4 号住 2 号住一旧 5 号住 3 号住一旧 6 号住 4 号住一旧 2 号住、5 号住一旧 3 号住 6 号住一旧 1 号住

(大塚 孝司)

### 3 遺構と出土遺物

#### (1) 縄文時代の遺構と出土遺物

##### a. 炉穴（第 172 図）

縄文早期の貝殻条痕文期の炉穴と思われる遺構が 4 基検出された。遺物はほとんど検出されていないが、グリッド出土の土器のうち条痕文土器は野島式である。これにより検出された炉穴の時期は縄文早期の野島式期の所産と思われる。

##### 1 号炉穴（第 172 図）

長径 1.85 m、短径 1.05 m の橭円形である。主軸はほぼ北を向いている。炉床部は若干掘りくぼめて築かれている。焼土の中から条痕文の極めて小さい土器片が 2 片出土している。

##### 2 号炉穴（第 172 図）

第 2 号土壤によって大半を破壊されており、焼土の部分が検出されたのみである。残存部は長さ 0.30 m、幅 0.55 m である。

##### 3 号炉穴（第 172 図）

長径 1.10 m、幅 0.40 m である。形状は炉床部の一方が張り出した橭円形を呈している。炉床部は、若干掘りくぼめて築いている。床はかなり焼けており、堅かった。

##### 4 号炉穴（第 172 図）

6 号住居址により一部を壊されているが長径 1.50 m、幅 0.70 m の橭円形を呈するものと思われる。炉床部はよく焼けており焼土塊が残っていた。主軸はほぼ北を向いている。

##### b. 住居址

###### 1 号住居址（第 173 図）

21-E, 22-E, 22-F, 22-G の各グリッドにかけて検出された。平面形は全体を確認しえず不明であるが判明した 1 辺は約 4.2 m であり、方形を呈するものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面までの高さは 10 cm 前後である。炉は北西部に位置し、おおよそ南北 80 cm、東西 50 cm の橭円形を呈する地床炉であり、若干掘りくぼめて構築されている。焼土が覆土として充填されていた。床面は炉面周辺が若干しまっていたが、他の部分は一様に軟弱であった。柱穴は検出につとめたが検出することはできなかった。覆土はうすく堆積しており、色調は暗褐色であった。遺物は覆土中より、土器片が若干出土したにすぎない。当住居址の時期は出土土器より、縄文前期黒浜式期と推定される。

###### 1 号住居址出土土器（第 174 図 5～19）

1～4 は爪形文を持ち胎土には鐵錐を多量に含んでいる。1 は口縁部破片であるが口唇部を欠損している。平行沈線間に爪形文を 3 段にわたり施し、以下  $R\{L, L\}R$  の縄文を交互に付し、羽状縄文を施している。2, 3, 4 は平行沈線間に爪形文を施した口縁部の破片である。各々何段かにわたり施している。5 はゆるい波状曲線を呈し、平行沈線間に爪形文を施すものであ